

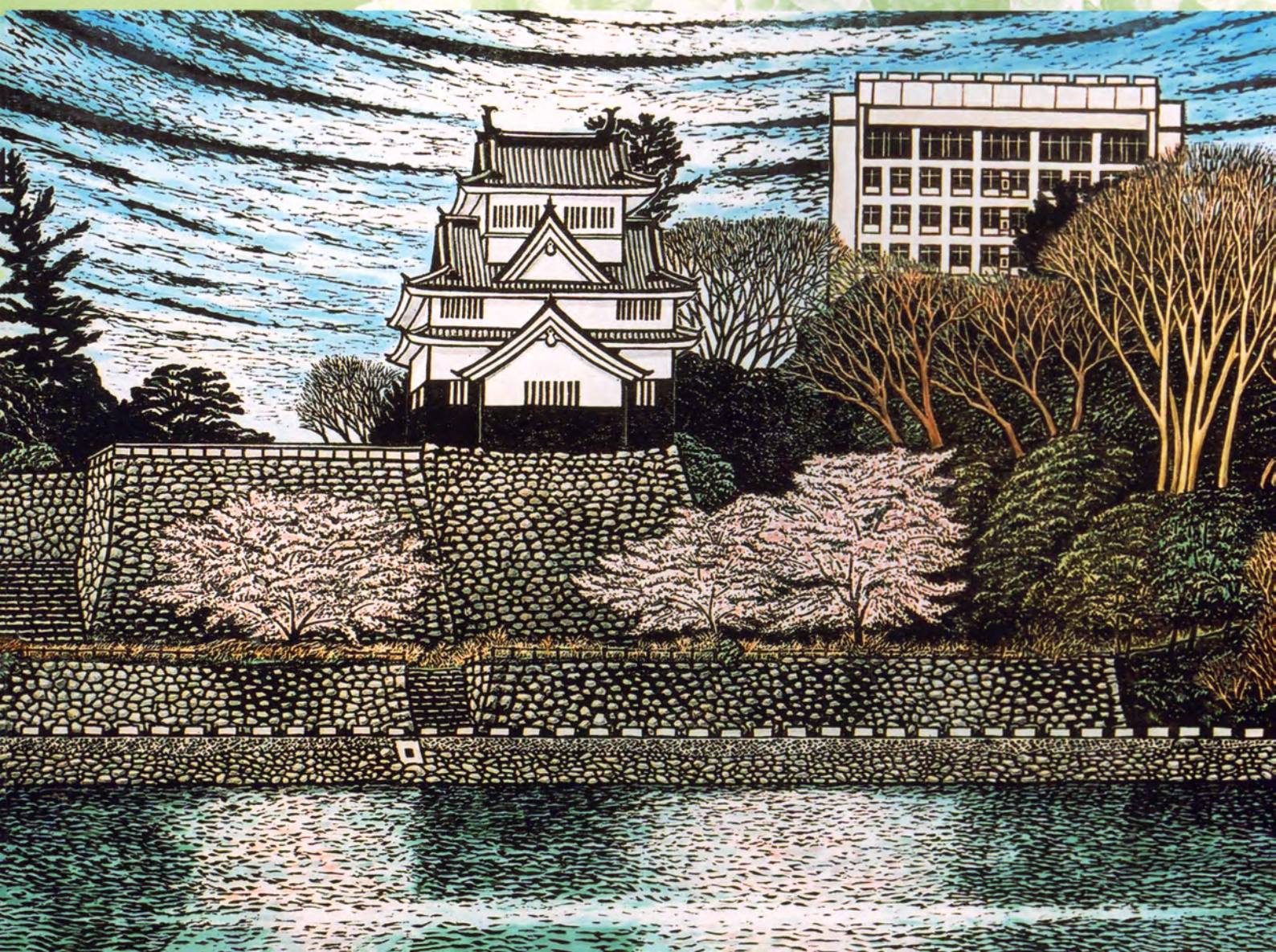
校区のあゆみ

八町

豊橋校区史

17

Hatcho







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 八 町



鬼 祭 (新村猛 撮影)





吉田藩士屋敷図 (天保~嘉永の頃)



豊橋市公会堂

昭和6年（1931）に建造されたロマネスク様式の建造物で、ドーム頂までの高さは16mある。

平成10年（1998）に国の登録文化財になった。



豊橋ハリストス正教会

大正2年（1913）に建造され、昭和58年（1983）に市、昭和59年（1984）に県の有形文化財になった。



市電の走る 国道1号線

公会堂前の歩道橋から東を望む。

（左の建物は豊橋警察署）

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



愛知大学名誉教授
元学長

牧 野 由 朗

さくらの花がほころび、タンポポが咲き競う。「ピカピカ」の一年生が両親と手を携えて小学校の校門をくぐる。そんな入学式の風景に私は教育の原点をみる。そこには親子の絆があり、感動があり、大きな夢がある。私も昭和8年に八町尋常小学校に入学した。

人間の基礎的人格構造は、通常5歳以前に形成される、というのは精神分析学における共通した見解である。小学校は、その人格構造の形成過程にある子供たちが、はじめて体験する公的な教育機関であり、それは未知なる世界との遭遇を意味している。

小学校教育は、単に学校や先生たちだけの問題ではない。より本質的には家族生活における人間関係のあり方、地域社会や全体社会の文化のあり方に大きな影響を与えるものである。私は以前から「新しいコミュニティの創造」の核心は、小学校区にあると主張してきた。家族を単位として構成される小学校区は、子供らの教育の場としてあるだけでなく、校区住民の「ふるさと」であり、文化センターの機能を担わなければならない。

市制100周年を記念して「校区史」が出版されるこの機会に、あらためて校区の歴史を辿り、校区のもつ現代的意義と役割を認識していただければ幸いである。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 八町校区の位置 7
- 2 八町校区の自然 7
 - (1) 地形 7
 - (2) 気候 7
- 3 交通 8
 - (1) 東海道 8
 - (2) 国道1号 8
 - (3) 別所街道 8

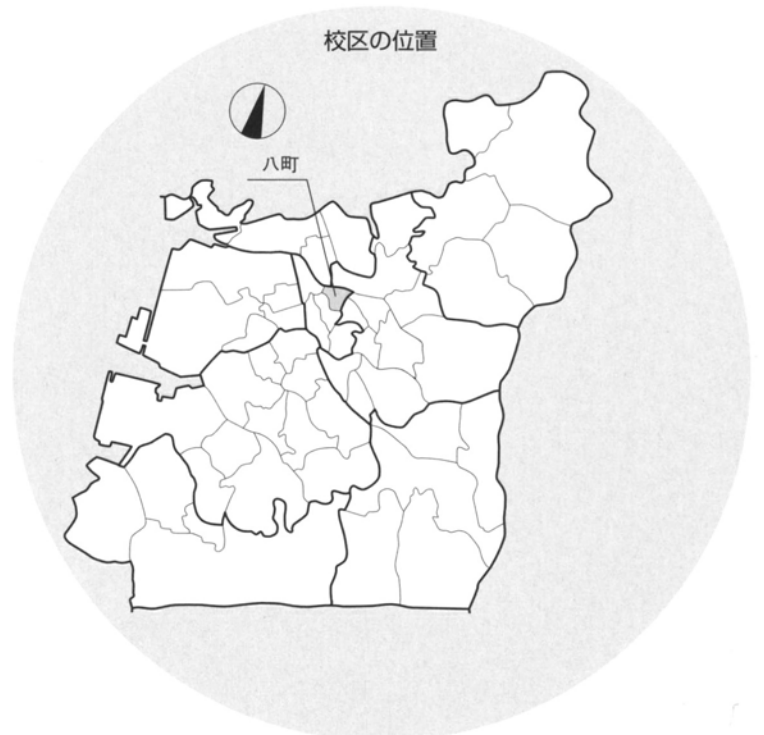
第2章 歴史と生活

- 1 八町校区の歴史 9
 - (1) 原始時代 9
 - (2) 古代 9
 - (3) 中世 9
 - (4) 近世 11
 - (5) 近代 11
 - (6) 現代 13
- 2 吉田城と城下 14
 - (1) 吉田城 14
 - (2) 城下町と周辺 17
 - (3) 十八聯隊 19
 - (4) 官庁街 22
 - (5) 牟呂用水 24
 - (6) 「市電」 26

第3章 教育と文化

- 1 学校教育・保育園 27
 - (1) 藩校・寺子屋時代 27
 - (2) 八町小学校のあゆみ 27

- (3) 八町小学校の活動 32
- (4) 高等小学校と中等教育 33
- (5) その他の学校・幼稚園・保育園 35
- 2 八町校区の活動 35
 - (1) 体育活動 35
 - (2) 市民館活動 36
 - (3) 交通安全活動 37
 - (4) 青少年健全育成活動 38
 - (5) 防犯活動 38
 - (6) 防災活動 39
- 3 八町校区の史跡・文化財等 39
 - (1) 神社・仏閣・教会 39
 - (2) 建造物・碑等 40
 - (3) 伝統行事・芸能等 42
- 4 八町校区ゆかりの人物・伝承等 43
 - (1) 校区に縁のある作家 43
 - (2) 民話と伝説 43
- 編集後記 46



表紙：「吉田城」1996年 高橋規夫

八町小学校昭和22年（1947）卒業
木版画集「三河」（2000）所載

第1章 自然と環境

1 八町校区の位置

八町校区は豊橋市域のほぼ中央の北よりに位置し、市内を蛇行しながら流れる豊川と、その豊川に合流する朝倉川の南側に広がっている。しかし、八町校区は豊橋市街地の中では北の方に位置している。それは豊川と朝倉川の合流点に永正2年（1505）に築かれた今橋城（吉田城）を中心に、順次町並みが主として南方に広がったからである。江戸時代には吉田城を取り囲むように武家屋敷があり、さらにその外側には東海道が通り、東海道沿いにはいわゆる吉田宿24町（表町12か町と裏町12か町）があった。その表町12か町のうち、曲尺手町・鍛冶町・下モ町・今新町（現在の西新町）・元新町（現在の東新町）は八町校区に属していた所である。

2 八町校区の自然

(1) 地形

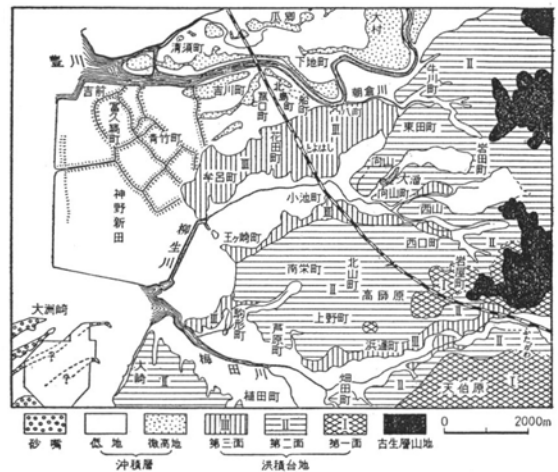
豊橋市の地形（豊橋市が載っている土地）は、大別して沖積低地と洪積台地に分けることができるが、豊橋市街地の大部分は洪積台地に載っている。その洪積台地は高い方から低い方へ第1面から第3面まであり、八町校区および中心市街地は、最も低い標高8～10mの第3面の段丘上にある。そのため、八町校区の地形は全体的に平坦で、安定した地層となっている。ただ飽海町から下がった朝倉川の北側は、標高3～5mの広い沖積低地（豊川がつくった堆積地）となっている。

(2) 気候

豊橋地方は、年平均気温15.5～16.5℃、年降水量約1,600～1,800mm、無霜期間（霜の降りない日数）が230日以上あり、比較的温暖な東海地方の典型的な良い気候である。しかし、冬には平均風速7m内外の北西の季節風が空っ風となって吹き、雪が降ることは少ない。

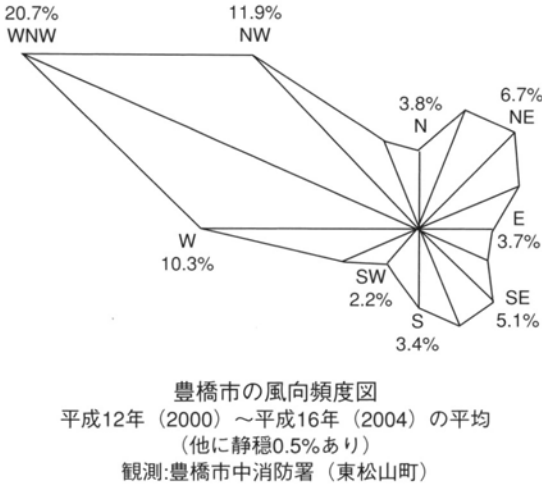
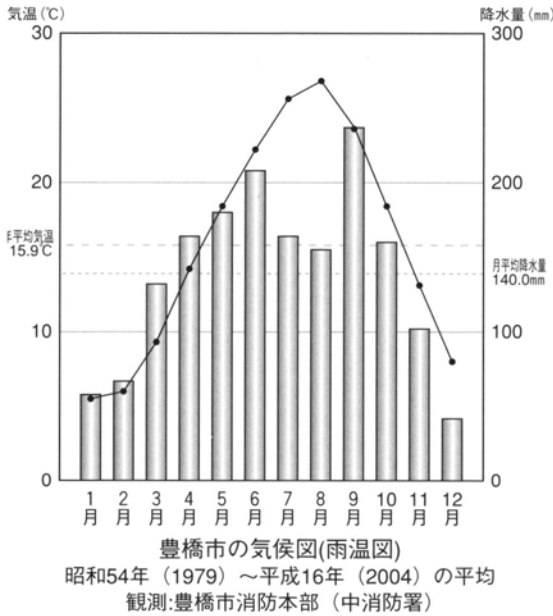
八町校区内には気象観測点はないので、豊橋市消防本部（中消防署、東松山町）の気象観測による気温・降水量・風向を示せば、次ページの図表のとおりである。

なお、八町校区の特異気象として「竜巻の襲来」がある。昭和16年（1941）11月28日に大崎町で発生した竜巻と、平成11年（1999）9月24日に野依町付近で発生した竜巻が、二つとも舟原町を經由して、西新町、旭町から飽海町を通過し、それぞれに被害があった。発生地点と途中の経路が異なる竜巻が、八町校区に入って二つともほぼ同じような幅100



豊橋の地形

mほどのコースを通ることは、何か特異性があるのかもしれない。



3 交通

(1) 東海道

江戸幕府を開いた徳川家康は、江戸を中心にして五街道を整備したが、五街道のうち、江戸と京都を結ぶ東海道が最も重要な道路であった。東海道五十三次の内、吉田宿は江戸日本橋から数えて34番目の宿場であるが、八

町校区にはほぼ東西に東海道が通っていた。ことに下モ町(今は鍛冶町・八町通五丁目)には東惣門(城下に入る東の町境にあり、人びとの出入りを取り締まった)があり、またその近くの別所街道に通じる町角には秋葉山常夜灯(灯籠)があった。その常夜灯は、現在は八町通五丁目の交差点の一角に復元されている。

(2) 国道1号

国道1号は、東京と大阪を結ぶ我が国で最も重要とされる総延長544.5kmの幹線道路で、豊橋市内を南東から北西に向かって貫通し、市内の延長は16.6kmである。その国道1号は八町校区内では旧東海道とほぼ平行して直線的に東西に通っている。そして八町通二丁目から八町通五丁目までは、道路の中央を路面電車(豊橋鉄道市内線)が通っているが、国道1号を路面電車が通っているのは大変珍しく、全国でここだけである。なお、この区間は路面電車の専用軌道を設け、専用軌道は自動車の通行を禁じているので、交通安全および都市景観のうえからも好評を得ている。

(3) 別所街道

別所街道の起点は東海道吉田宿の東惣門(下モ町)の脇で、東北角に常夜灯があった。そこから北へ進み、餌指町・飽海町から朝倉川を渡って牛川に抜け、和田辻に出る。さらに富岡へは山添道、庭野へは三ヶ日街道、大野へは川添道、北設楽郡東栄町本郷の別所までは金指街道を経由する。別所街道という名称は、上記の街道が明治9年(1876)にまとめて三等県道に指定されたことに始まる。

豊橋から新城・大野・東栄町方面へは、県道69号(豊橋鳳来線)経由で新城市庭野を通るのが順路であるが、幅員が狭いので国道151号(豊川経由)の方が多く利用されている。

第2章 歴史と生活

1 八町校区の歴史

(1) 原始時代

(石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代)

八町校区には、石器時代および縄文時代の遺跡は見当たらない。弥生時代には「飽海遺跡」と呼ばれる遺跡が豊橋公園のテニスコートから元の体育館跡にかけての地域にあった。この辺りからごくわずかではあるが弥生式土器の破片が発掘されている。このことから今から2000年ぐらい前から八町校区には人が住んでいたと考えられるが、それは瓜郷遺跡とほぼ同じ時期である。古墳時代の遺跡は、近くには東田古墳があるが、八町校区には古墳は発見されていないので、この時代がどんな様子であったかはよくわからない。しかし、弥生時代には人が住んでいたのも、引き続き古墳時代にも住んでいたのではないかと思われる。

(2) 古代 (奈良・平安時代)

承平年代 (930年頃) に著された「わみやうしやう和名抄」に、三河国渥美郡の6つの郷ごうが書かれている。はた わだ あくみ たかし いそべ おおかべ幡太・和太・渥美・高蘆・磯部・大壁の6つで、この中の渥美郷あくみのごう (安久美・飽海) が八町校区一帯を指すのではないかと考えられる。

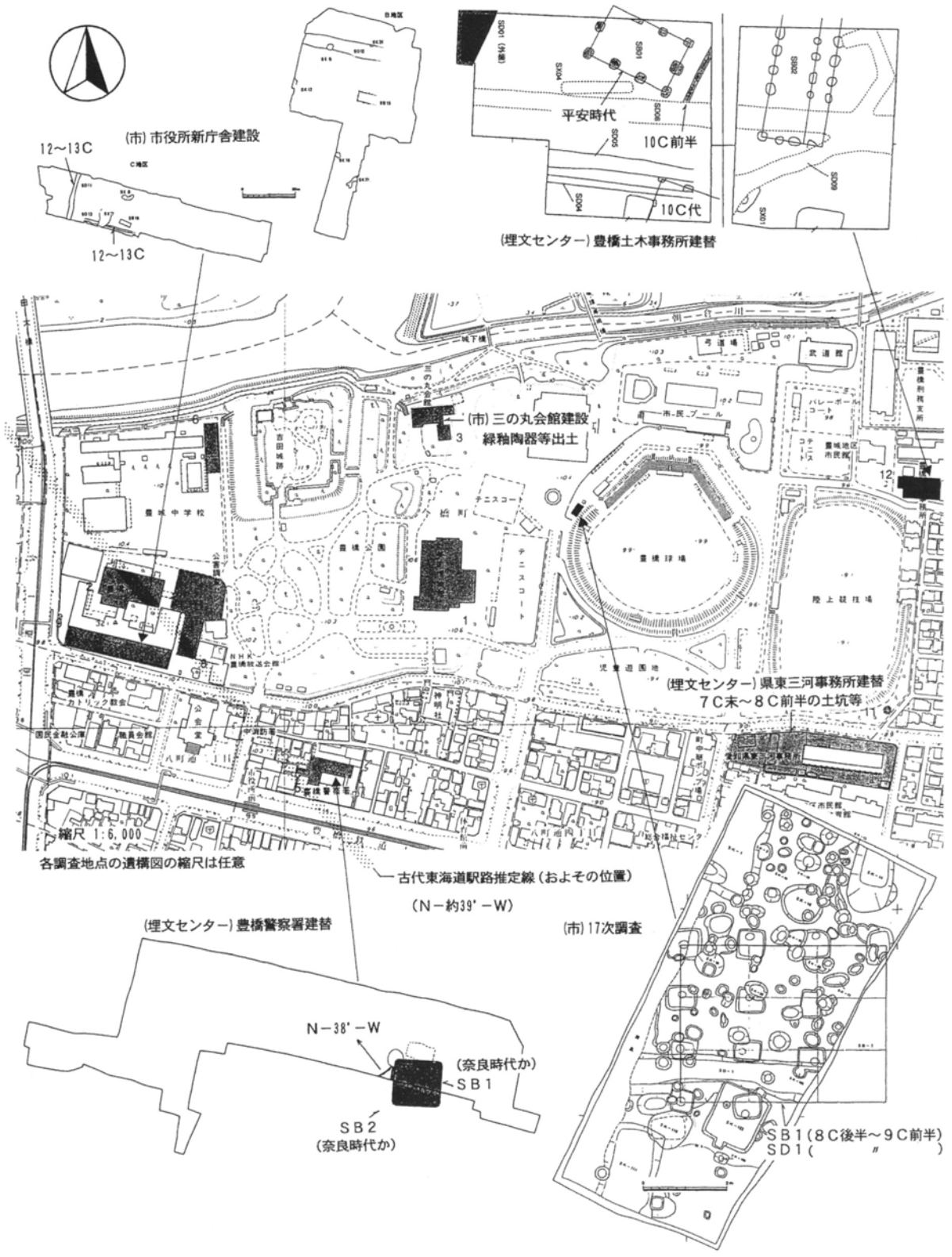
あくみかんべしんめいしや安久美神戸神明社 (中八町の神明社) の創立は、天慶年代 (940年頃) とされている。朱雀天皇がたいのまきかど平将門の反乱が平定されたのをよろこんで、伊勢神宮に飽海郷の一部を寄進したといわれる。その神戸の中に神明社が建てられたのが始まりで、その場所は、今は豊橋

公園の旧市民プールのあった場所で、後に明治時代になってから、現在の場所 (八町通三丁目) に移された。

(3) 中世 (鎌倉時代・室町時代・戦国時代)

鎌倉時代には、じとう地頭になった武士たちが勢力を伸ばし、各地にしやうえん荘園 (田や畑) を自分の勢力下に置くようになった。この地方は、伊勢神宮との関係が深く、鎌倉幕府も神宮領を保護し、また、上皇の所有であるあくみのしやう飽海荘があったために領地を増やすことができず、力のある武士は現われなかった。

八町校区の中で、ひときわ目立つものに城がある。この城が築かれたのは、室町時代の永正2年 (1505) で、牛久保城主であった牧野古白によって今橋城 (のちに吉田城) として築かれた。現在、豊橋公園にある三層の鉄くろがね櫓は、昭和29年 (1954) に再建されたものである。この城は東三河の重要な場所として、そのころ力の強かった今川・武田・松平 (のち徳川) 氏らの戦国武将による戦いが繰り返され、城主が目まぐるしく代わった。天正18年 (1590) には池田照政 (のち輝政) が城主となり、15万2千石 (当時の石高) の城下町としてふさわしい町づくりに努力した。このころ、全国的に市が開かれるようになり、飽海と呼ばれていた八町付近にも市ができ、各地からたくさんの人が集まって物を売り買いました。毎月3回「二」のつく日に市が開かれたらしく、この場所を「ふつかいち二日市」と呼び、地名として長い間使われていた。やがて八町付近はこの地方の中心となり、家が建ち並んで、



飽海遺跡(吉田城址)の古代遺構

町の様子もかなりできてきた。したがって、八町は戦国時代の終わりごろ（約430年前）にその基がつくられたといえる。

(4) 近世（江戸時代）

徳川家康は慶長8年（1603）に江戸幕府を開いたが、その2年前に東海道の宿駅を開設した。吉田の城下には東海道が通り、東海道の北側には外堀があり、外堀と内堀の間は武家屋敷が城を取り囲むようになっていた。また、足軽屋敷はその東西の外側にあり、現在の旭町および松葉町がそれに当たる。武士以外の農民や町人は住む場所がきびしく分けられていた。商人や職人は職業ごとに住む場所が決められ、「鍛冶町」という町名は現在も昔の名残をとどめている。



城下町時代の町名図

江戸時代の吉田（豊橋）は、城下町であると同時に宿場町でもあった。宿場町としての吉田宿の規模は、寛延3年（1750）の調査で吉田24町の戸数1,087軒・人口5,530人である。そのうち、八町校区内で表町12町として東海道に沿っていたのは曲尺手町（68軒・387人）、鍛冶町（62軒・327人）、下モ町（24軒・127人）、

今新町（61軒・278人）、元新町（43軒・143人）であった。東海道は人の通行も多く、上伝馬町・本町・札木町・呉服町を中心に賑わい、道筋に沿って家が一行に並んでいた。ただ、一歩裏道に入ると畑が多くあったようである。

江戸時代を通して、吉田城は東海道の重要な場所として有力な大名が9家12代にわたって城主となり、中ごろ以降は松平伊豆守7万石の城下町として、また東海道五十三次の宿場町として賑わい、その名を明治の頃まで響かせた。なお、「八町」という町名は江戸時代の末期にできたといわれている。江戸時代に改築された吉田城の外堀の内側を、東西8丁（町・1丁は約109m）にわたり、武家屋敷を貫くように直線的に道路が造られた。この道路を「八丁小路」と呼び、このことから八丁（町）の名が付けられた。八丁小路は、西は悟真寺から始まり、東は柳生門（現在の東八町交差点付近）までである。

(5) 近代（明治時代・大正時代・昭和初期）

明治新政府は、明治2年（1869）に吉田藩を豊橋藩と改称した。明治4年（1871）には廃藩置県が断行され、豊橋藩は豊橋県と改められたが、わずか4か月で豊橋県は額田県に統廃合された。その額田県も1年ほどで愛知県に統合され、ほぼ現在の愛知県が成立した。

一方、明治11年（1878）の郡区町村編成で豊橋を含んで渥美郡が成立し、郡役所は初め大手通りに設けられたが、明治19年（1886）に西八町へ新築移転し、大正12年（1923）の郡制廃止までここにあった。また、同じ明治11年（1878）の郡区町村編成で吉田24町・裏町・飽海村などで豊橋市街29町と豊橋村が編成された。それに関係する八町校区の町名の沿革は次の表のとおりである。

明治初年→	11.12.28	19.7.19	22.10.1	28.11.25	39.8.1
校区外3町	校区外 19 町		22.10.1 豊橋町	28.11.25 西八町 中八町 東八町	39.8.1 豊橋市
八町一丁目	11.12.28 八 町	19.7.19 八 町			
八町二丁目					
八町三丁目					
南 仲 町					
宮 下 町					
川 毛 町					
八 幡 町					
南袋町	袋 町				
北袋町					
東 町					
土 手 町					
下 町					
鍛 冶 町					
曲尺手町					
餌 指 町	11.12.28 豊橋村	28.1.25 豊橋町			
旭 町					
東 新 町					
西 新 町					
談合之宮町					
飽 海 村					
校区外3町					

明治時代の八町校区内の町名の沿革（数字は明治の年月日）

明治22年（1889）に市制・町村制が施行されて豊橋23町で豊橋町が編成され、役場は札木町の日本陣跡に設けられた。その町役場はその後、西八町から中八町へと移転した。

豊橋が市制を施行したのは明治39年（1906）8月1日で、全国で62番目（人口37,635人）の市であった。その時の仮市役所は中八町にあった旧町役場を利用したが、明治45年（1912）に西八町に洋風2階建の庁舎が落成した。この庁舎は昭和3年（1928）に焼失、一時すぐ近くの渥美郡役所跡に仮設置されたが、昭和5年（1930）に新庁舎がもとの位置に完工し、移転した。

明治17年（1884）に、明治政府は吉田城跡に兵舎を建設し、名古屋に設置されていた歩兵第18聯隊を明治18年にここへ移転した。吉

田城の東に隣接する武家屋敷跡は練兵場になった。明治27・28年（1894・95）には日清戦争、明治37・38年（1904・05）には日露戦争が勃発し、歩兵第18聯隊はそれぞれに出征した。また、明治41年（1908）には第15師団が高師原に誘致され、豊橋はだんだんと軍都としての色彩を濃くしていった。八町もその影響を受けて営門前（18聯隊の正門前）などに商店が立ち並び、町筋の様子が大きく変わっていった。東八町や旭町には軍人の住宅が多くあった。

大正14年（1925）に、市内電車が駅前～東田間および神明町～柳生橋間4.2kmに走るようになり、豊橋駅から八町の辺りにかけて、ますます賑やかな町になっていった。八町校区内には営門前・練兵場前・赤門前・旭橋および校区の境に前畑の停留所があった。

昭和6年（1931）に、八町通りに鉄筋コンクリート3階建の豊橋市公会堂が建てられた。建築様式はロマネスク風で、中世ヨーロッパの教会に似た造りである。正面両側のドーム頂上までの高さは16m、大集会室の定員は1,557名で、市内の近代的建築物の発祥といわれた。昭和20年（1945）6月には豊橋市役所に転用されたが、豊橋空襲の戦災からは免れた。

昭和6年（1931）に満洲事変が勃発し、昭和12年（1937）には日華事変が始まった。さらに昭和16年（1941）にはアメリカ・イギリスなどを相手に太平洋戦争が起こり、豊橋は軍都としての色合いをますます濃くしていった。歩兵第18聯隊（のちに中部第62部隊・第100部隊などに編成替えあり）の将兵は、軍旗を先頭に営門を出発し、市民に見送られて大手通り・広小路を進み、豊橋駅で肉親と別れて戦場におもむいた。八町校区からも中国大陸や南方戦線に出征し、帰還しなかった人も多かった。中学生以上の学生・生徒は軍需

工場に動員されて兵器を生産した。一般市民の生活も、米や砂糖などの食料品・衣料品などは配給制になり、物資が不足する不便な生活になった。

昭和20年（1945）6月19日深夜から20日の未明にかけて、豊橋はアメリカ空軍B29爆撃機約90機の焼夷弾攻撃を受け、全戸数の70%・市街地の90%が焦土と化し、戦災死は624名におよんだ。八町校区も、飽海町および中八町・東八町・談合町・旭町の一部を除いて焼失した。

昭和20年（1945）8月6日に広島に原子爆弾が投下され、8月9日には長崎にも原爆が落とされた。8月7日には豊川海軍工廠が空爆され、2,500人以上の犠牲者が出た。八町校区の住民にも、徴用工・女子挺身隊・学徒などとして工廠に動員されていた人々が少なからずあって、その中の幾人かが犠牲となった。

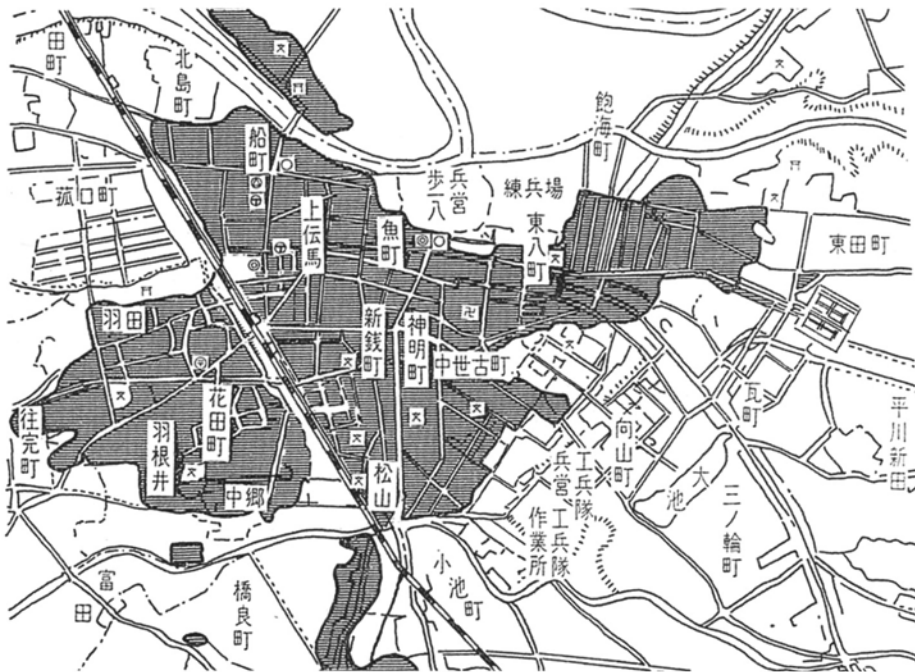
昭和20年（1945）8月15日正午、ラジオで玉音放送（天皇の終戦の詔勅の放送）がされ、満洲事変から太平洋戦争に至る15年間の戦争が終わった。

(6) 現代（終戦～）

昭和20年（1945）8月、日本の降伏によって第2次世界大戦は終わり、一応世界に平和がおとずれた。日本を占領したアメリカ軍を中心とする連合軍は、東京に総司令部をおき、日本政府を通じてポツダム宣言にもとづく民主化のためのさまざまな指令を出した。それは軍隊の解散・戦争責任者の裁判・財閥の解体・農地改革・憲法改正・教育基本法の制定・学校制度の改革などである。

戦後の八町校区の歴史の中で特筆すべきものは、昭和21年（1946）10月21日に昭和天皇が八町国民学校へ公会堂から徒歩でお越しになり、教育事情を視察されたことである。

農地改革は豊橋市でも昭和21年（1946）5月から開始された。しかし、農地の少ない八町校区には大きな影響はなかった。八町校区に関係の深かったのは、軍隊の解散に伴う吉田城内の旧歩兵18聯隊跡地の利用であった。空襲による焼失を免れた兵舎は、市役所をはじめとして豊橋放送局・新制中学（豊城中学）などいろいろな入居者によって利用された。



豊橋市戦災被害図（昭和20年6月20日）



博覧会のポスター

また、城内東方の練兵場跡には、昭和23年（1948）に豊橋球場、昭和24年に陸上競技場・バレーボールコート・テニスコートなどがオープンし、昭和25年には第5回国民体育大会の会場となった。この吉田城跡一帯の国有地は総合公園として開放され、昭和29年（1954）には豊橋産業文化大博覧会が開催された。その際、吉田城北西角には隅櫓（鉄櫓）が再建され、吉田城のシンボルとなった。この博覧会の会場の跡地には豊橋市立動物園が開園し（昭和45年閉園）、さらにその跡地には昭和54年（1979）に豊橋市美術博物館が造られた。なお、中八町・東八町のうち、吉田城跡の豊橋市役所・豊橋公園などには、昭和38年（1963）に今橋町の町名が設定された。さらに豊橋公園内には、昭和36年（1961）に豊橋市体育館・同40年（1965）に市民プール、同48年（1973）に武道館が造られたが、いずれも他所に移転した。

吉田城跡地以外に造られた公共施設に愛知県東三河事務所がある。昭和30年（1955）に中八町に開設され、昭和33年に八町通五丁目に庁舎を新築移転、平成8年（1996）に改築して東三河総合庁舎が完成した。

八町小学校の児童数の推移をみると、昭和20年（1945）4月には疎開児童を含めて1,643名も在籍したが、戦災直後の昭和21年には1,029名に激減している。しかし、終戦後児童が徐々に復帰してきて、昭和26・27年には1,300名を越えるマンモス校となった。そのため昭和28年（1953）に牟呂用水以東を旭小学校に分割して、児童数は1,046名となっ

た。その後第一次ベビーブームの児童が入学し、昭和33年（1958）には1,119名まで増えた。しかし、高度経済成長期を迎え、皮肉にも八町校区にはドーナツ化現象（中心部の人口が減り、周辺部の人口が増加する）がおり、八町小学校の児童数は激減し、創立130周年を迎えた平成15年（2003）には全校生徒数は199名になってしまった。

行政町名	世帯数	人口		
		男	女	計
飽海町	128	207	214	421
旭町	165	184	236	420
旭本町	94	132	129	261
鍛冶町	101	157	164	321
曲尺手町	117	169	206	375
談合町	108	127	128	255
西新町	64	103	123	226
八町通一・二丁目	98	112	125	237
八町通三丁目	143	164	197	361
八町通四丁目	83	102	137	239
八町通五丁目一区	120	169	197	366
八町通五丁目二区	93	355	101	456
東田町西脇二区	94	127	119	246
合計	1,408	2,108	2,076	4,184

八町校区 町別世帯・人口（平成12年国勢調査）

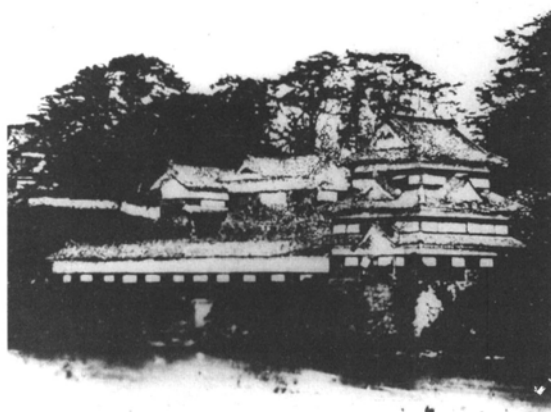
2 吉田城と城下

(1) 吉田城

今橋城と吉田城 この地に初めて城を築いたのは牛久保城主牧野古白で、西三河の松平氏に備え、駿河の守護職であった今川氏親と謀って永正2年（1505）に築城し、今橋城と名付けた。当時の位置と規模については明確でないが、現在の吉田城址本丸跡の東側、「藩祖豊城神社」碑と神武天皇像の立つ金柑丸跡を中心とする一帯が今橋城の本曲輪であったと推測されている。

戦国争乱の世の中で、今橋は早くも築城の翌年、田原の戸田憲光によって攻略され、牧野古白は討死した。その後今橋城をめぐる戸田氏と牧野氏が争奪戦を繰り返している間の享禄2年（1529）、岡崎の松平清康がこの地を攻め、東三河の主要部を支配下に置いた。しかし清康が亡くなり、広忠の代になると松平氏の勢力は急速に弱まり、逆に強大となった駿河の今川義元に攻略され、今川氏の三河支配の拠点として今橋城には城代が置かれた。この頃今橋城は吉田城と改められたと言われている。

永禄3年（1560）の桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に敗れて後、松平（徳川）家康が江戸へ移るとともに池田照政（輝政）が城主となった。吉田城はこの頃、中世城郭から近世城郭に築き直され、拡大されていった。輝政は慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの功により姫路へ移り、その後には竹谷松平2代、深溝松平2代、水野忠清、水野忠善、小笠原4代、久世重之、牧野2代、大河内松平の松平信祝、本庄松平の松平資訓、そして再び大河内松平7代と続き明治維新を迎える。



明治初年の吉田城

城壁の配置は池田輝政によって始められ、江戸時代前期にかけて整備されていった。吉田城の城域は、東は現在の飽海町から旭町、南は曲尺手町から呉服町、西は関屋町に達す

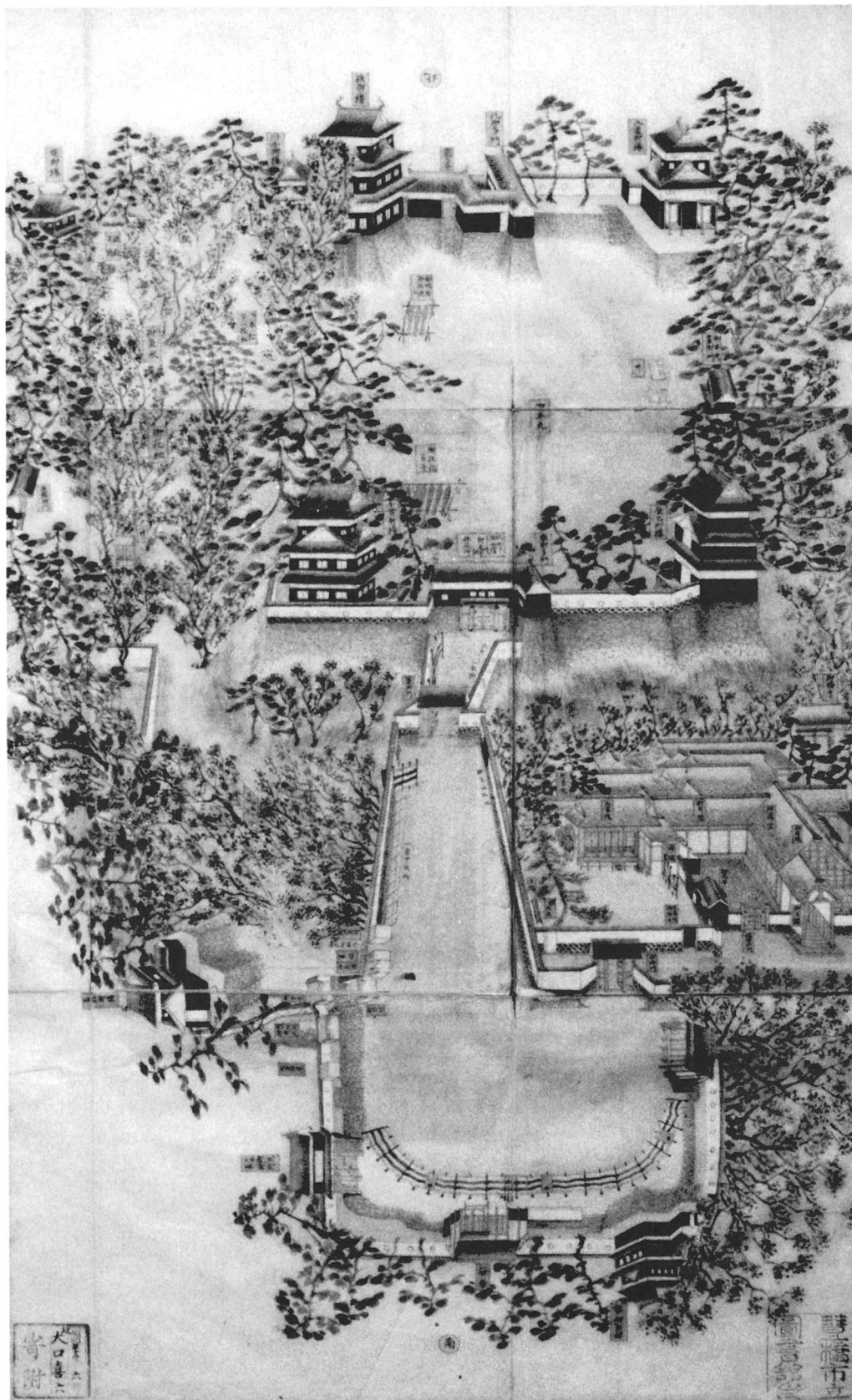
る広大なものであった。しかも、豊川を背にした本丸を中心にその外側に二の丸、さらにその外側に三の丸を配した半円郭式縄張りであった。その周囲には土塁と堀がめぐらされて、侍屋敷や町方などと区別されていた。

石垣と刻印 大規模に拡張された吉田城も石垣のあるのは本丸だけで、他は土塁であった。石垣の壁面は、内側・外側合わせると約50面になる。石垣は近世城郭の特徴の一つであると言える。石の積み方は大きく3種類に分類される。野面積み（自然石を砕いてそのまま積んで行く）、打込ハギ（石の角を削り多少でも石と石がかみ合うようにする）、切込ハギ（石の面を平らにして石と石が隙間なくかみ合うようにする）の3つである。本丸の北の端に昭和29年（1954）に復元された鉄櫓くわ下の西側の石垣は野面積みであるが、後世の手直しの跡のない池田輝政時代のものだとされている。さらにその石垣の石をよく見ると、いろいろな印のついている石がある。大阪城や名古屋城にも見られる刻印は、築城工事を分担した大名や家臣などの印であると言われ、吉田城でも50余り確認されている。

大手門 今橋城の時代には戸田氏の仁連木城に対抗して東の飽海に向いていた大手門（城の正面）は、池田輝政によって城郭の南に移された。その位置は、現在の公会堂の前から



大手門



吉田城本丸二の丸略絵図

南に伸びる大手通りとNTTの裏を東西に通る板新道との交差点の北側である。板新道とその東に伸びる通称裏呉服町（呉服町の北）、さらにその東の通称立川町（曲尺手町の北）は外堀の跡と推定されている。

大手門の前には、高札（禁止のお触れなどを知らせる広報板）の立つ広場があった。札木町の名の起こりである。

曲尺手門 立川町（つまり外堀）と神明小路（現在の「くすのき通り」に重なる）とが交わる所にあり、大手門と同様、堀には橋が架けられていた。安久美神戸神社は、明治17年（1884）までは現在の「くすのき通り」から豊橋公園に入って北へ進み、朝倉川に突き当たる手前の東側にあったので、この南北の通りは神明小路と呼ばれていた。

(2) 城下町と周辺

吉田宿東惣門 惣門は城下に入る第一関門であった。吉田城下の場合には東海道の東西の入り口に設けられ、東惣門は下モ町（現在は鍛



縮小復元された吉田宿東惣門

冶町と八町通五丁目の一部）に、西惣門は坂下町（現在は湊町の一部）にあった。東惣門から西惣門までの間の東海道には、見通しを悪くして外敵の侵入を妨げるため幾つかの曲がり角が設けられ、東惣門のある下モ町だけでも実に六つの曲がり角があるという、典型的な城下町の姿を見せていた。惣門には番所

が置かれ、旅人に対する規制が行なわれた。門限は現在の午前6時頃から午後10時頃（当時の時刻は昼夜をそれぞれ6等分することになっていた）ので現在とは季節により差がある）までで、これ以外の時間帯の通行は原則として禁止されていた。

飽海 史料では校区内で最も古く「和名抄」に見え（本章1（2）参照）、「渥美」に「安久美」と訓が付されている。中世には伊勢神宮の荘園として「飽海神戸」と呼ばれた（田原の「本神戸」に対する「新神戸」）。安久美神戸神社の創建は同社の社伝によると天慶2年（939）とされている。後世牧野古白はこの地に今橋城を築いた。因みに現在の「今橋町」の町名は昭和38年（1963）に付けられたものである。

飽海村は明治11年（1878）に豊橋村の一部になり同28年（1895）「豊橋町大字飽海」、大正15年（1926）「豊橋市飽海町」と改称され現在に至っている。

西脇 東惣門で東海道と分かれた別所街道は飽海口から坂を下って朝倉川を橋で渡り今の牟呂用水の「坂上橋」の所で河岸段丘が上がっていた。街道は牛川、石巻と段丘上を北進し、富岡、大野、本郷を経て飯田に至る、この地方の交通の要路であった。今の県道は旭橋から牟呂用水沿いに進み築堤の上を通っているが、これは明治中期の用水開通後のことで、江戸時代の街道は今の飽海と西脇の間を通っていた。今でも餌指通りから朝倉川までの家並みは昔の面影を残しているが、街道の西側が飽海で東側が西脇である。

明治初期の文書には仁連木村字西脇と記されているが、その前には西脇村と呼ばれた時代もあったと思われる。のち仁連木村は瓦町村と合併して東田村となり、明治22年（1889）の市制・町村制施行当時は飯村・三ノ輪村などとともに豊岡村に属していた。明治39年

(1906) 市制施行直前の豊橋町に合併、大正15年(1926)には豊橋市東田町字西脇となった。行政区画としては現在も用水の東も西も「東田西脇町」一本であるが、用水以西の区域(東田西脇町二区)が昭和27年(1952)に八町校区に編入された。

旭町 吉田藩の東組足軽屋敷があった(西の足軽屋敷は松葉町)。この屋敷町を南北に通る5本の小路があって、城に近い西側から一番町、二番町、三番町、四番町、五番町と呼ばれた。これらの呼び名は今でも親しまれている。昭和33年(1958)牟呂用水から東(四番町以東)の区域は旭校区とされた。

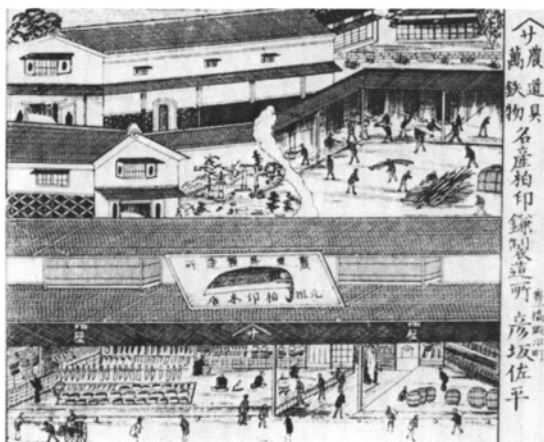
餌指 旭町の北端を東西に通る道路沿いは江戸時代には餌指町と呼ばれた。鷹匠(鷹狩りの鷹の世話を役目とする侍)が住んでいたのが餌指町と呼ばれるようになったとされている(名古屋や静岡などには「鷹匠町」という地名がある)。明治15年(1882)飽海と同じく豊橋村の字の一つとされた。餌指通りの名は今でも残っている。

八町 江戸時代に武家屋敷を東西に貫通していた道路が、悟真寺の前から柳生門(現在の東八町交差点の東あたり)までおよそ八町(1町は約109m)あったことから八町小路と呼ばれ、町の名前ともなった。明治中期に西八町・中八町・東八町に分けられ、現在は八町通一丁目から五丁目となっている。いうまでもなく八町小学校の名のもとである。

下モ町 「吉田24町」の一つで、西は鍛冶町に、東は東惣門を介して今新町(現在の西新町)に接し、今は痕跡を探すのも困難な東海道の「曲り」のあった所である。下り町(現在の花園町の一部)と区別するためモの字が送り仮名された。現在は鍛冶町と八町通五丁目に吸収され、町名は消滅している。

鍛冶町 牧野古白は永正2年(1505)今橋城を築く時、牛久保村から多くの鍛冶職人を呼

び寄せて八町のあたりに住ませた。天正18年(1590)吉田城大改築の時これらの職人を現在の新吉町のあたりに移住させたが、元和4年(1618)頃に街道筋に移した。これが今もある鍛冶町の起源である。街道筋の現在地に来る前の所は元鍛冶町と呼ばれた。18世紀頃の鍛冶町の戸数は約60軒で、40人前後の鍛冶職人がいて繁盛していた。農鍛冶が主であったが、特に「吉田鎌」は広く世に知られる名品であった。東海道の吉田宿では鍛冶町の鍛冶屋と札木町の飯盛女が名物であったと言われている。「吉田24町」の一つである。



銅版画「鍛冶町の農機具商」

戦後の都市計画により町の区域に変動があり、現在の区域は戦前の鍛冶町よりも東に移動した形になっている。

曲尺手町 同じく「吉田24町」の一つである。西は呉服町に、東は鍛冶町に接し、吉田城の外堀の屈曲に沿って東海道が大工道具の曲尺のように折れ曲がっていることから「かねのて」町と名づけられた。江戸方から京に上る時は現在の嶋田屋の前で南に折れ、次いで西に折れて豊川堂のある呉服町に入っており、その道筋は明治時代に東海道が国道1号となった後もはっきり見て取れたが、今は標識がないと分からなくなってしまった。現在の区域には戦前鍛冶町であった区域も含まれている。

談合町 吉田の町裏（町地の周辺の集落）で江戸時代は仁連木村の一部であった。明治初年の豊橋村の「談合宮町」が明治28年（1895）には豊橋町大字談合となった。町の名は町内の談合神社から来ている。昭和の初期までは1、2の製糸工場があった。都市計画により区域に若干の変動があった。

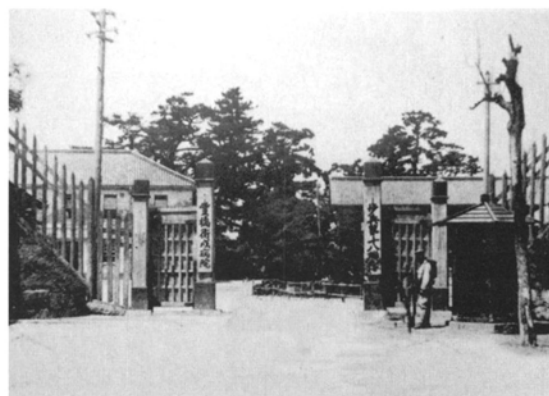
(3) 十八聯隊

吉田城は明治の廢藩置縣により空き家となったが、近代的陸軍の整備充実に伴い、明治17年（1884）5月、名古屋鎮台（のちの師団）に三河・遠江・駿河・伊豆を徴兵区域とする歩兵第18聯隊が新設され、旧吉田城内に名古屋鎮台豊橋分營の整備されるのを待って逐次移転し、同19年（1886）5月に移転を完了した。お城の東側の武家屋敷は取り払われて広い練兵場となった。この聯隊は昭和20年（1945）の敗戦により陸軍が解体するまでの60年間、豊橋市とりわけ八町校区民とは極めて縁の深い存在となり、十八聯隊と言えば八町校区の代名詞のようなものであった。将校の多くは八町校区内に居住し、その子どもは八町小学校に通った。その後同じ旧城内において歩兵第60聯隊、同118聯隊、同229聯隊等が開隊した。

徴兵検査や動員等の事務をつかさどる聯隊区司令部は練兵場の南東、東八町（現八町通五丁目、愛知県東三河総合庁舎がある）に設けられた。陸軍将校の親睦共済団体である偕行社もこの場所にあった。軍の警察として機密保持や思想統制にも当たった憲兵分隊は西八町にあった（現在は八町通一丁目と二丁目の間、国道1号が北に曲がったあたりと推定される）。

歩兵第18聯隊は名古屋を本拠とする第3師団に属していたが、日露戦争後の師団増設により明治41年（1908）第15師団が渥美郡高師

村に置かれ（司令部跡は現在愛知大学のキャンパスになっている）、18聯隊は15師団に転属した。この時期に南郊には陸軍の施設が集中し、豊橋は「軍都」となった。大正14年（1925）軍縮により15師団が廃されるとともに聯隊は3師団の所属に戻った。



十八聯隊八町門

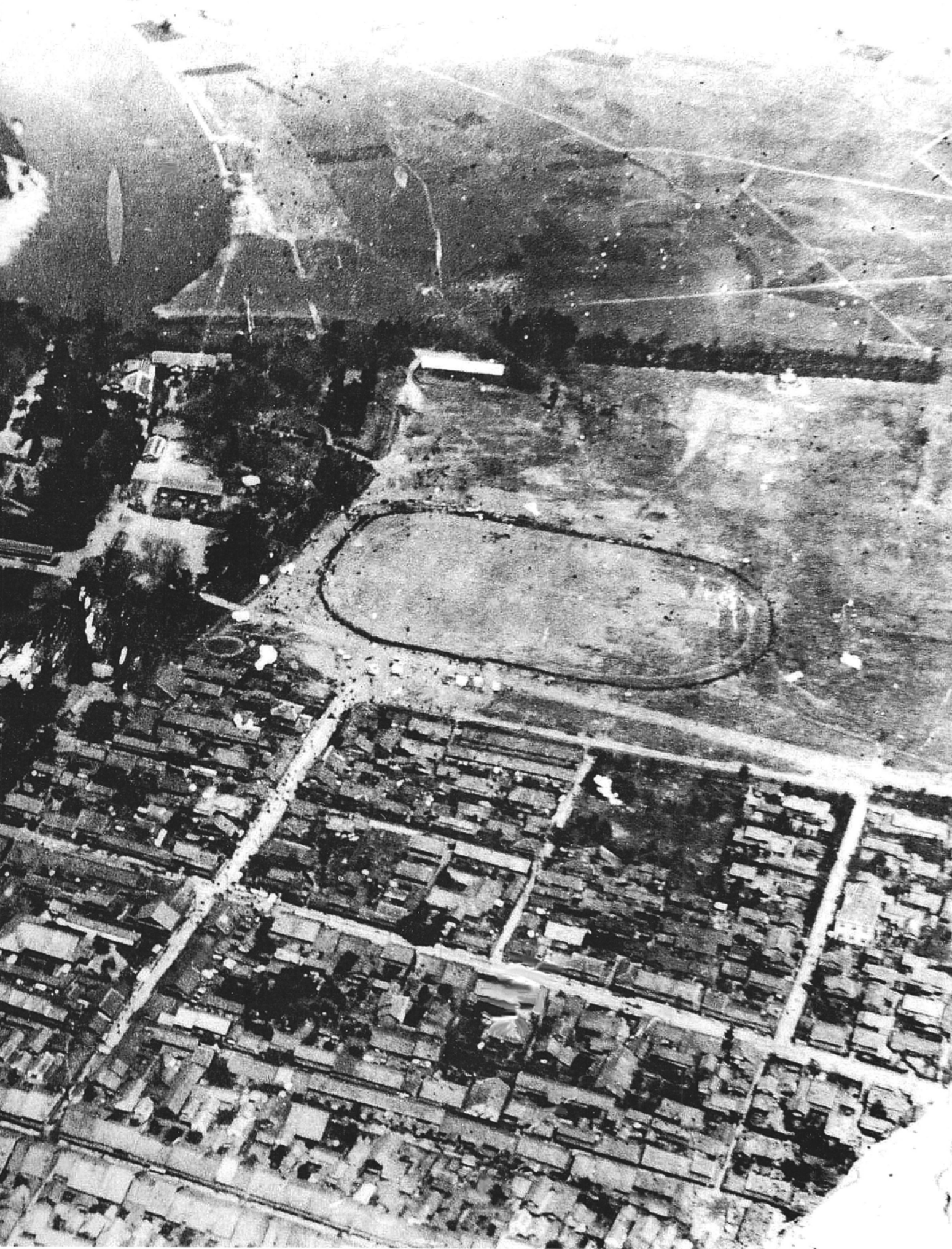
歩兵第18聯隊は日清戦争、日露戦争、満洲事変等に出動したが、昭和12年（1937）7月北京郊外の盧溝橋で発生した日中両軍の武力衝突が上海に波及した同年8月の動員で豊橋を留守にして中国各地を転戦したのち関東軍に転属し、満洲から南方に転戦、同19年（1944）にサイパン島とグアム島で玉碎し、ついに豊橋に凱旋することはなかった。留守になった兵營はその後、歩兵第118聯隊（中部第62部隊と呼ばれ、18聯隊と同時期に同方面で玉碎）、中部第100部隊等が使用した。100部隊は当時日本では数少ない飛行場設営部隊ということで、かつて18聯隊の兵隊さんが訓練をした練兵場では牽引車やブルドーザーが走り回るようになっていた。

敗戦後の食糧難のため、練兵場は一時期、市民に開放されて家庭農園となったこともあり、その東端（いわゆるチイ練兵）には住宅も建てられ、新八町と呼ばれた。農園であった期間は短く、のち豊橋球場と陸上競技場が建設された。



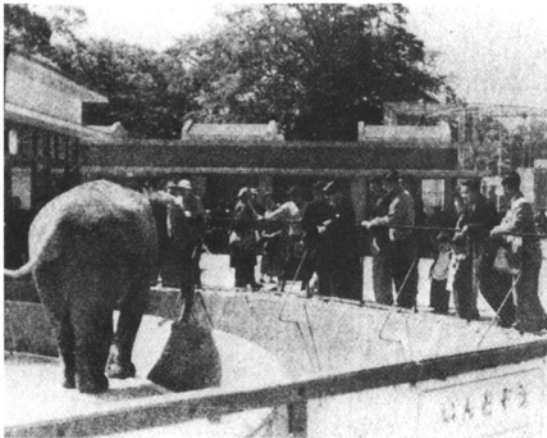
大正時代（推定）の吉田城址周辺 營門前の道路と八町通りの角に公会堂が見えないことから大正時代の撮影と思われる。「金色島」の形がはっきりしている。

右手の練兵場にトラック様の環が造られているが、この日何か大がかりな催しが行われたのであろう。当時、写真撮影のために飛行機を飛ばすのは容易なことではなかった。



八町通りが左右に白く見えるが、呉服町から曲尺手にかけての東海道沿いは軒並み屋根が一回り大きいので一目でそれとわかる。中央やや下の大きな屋根は裁判所である。左下の森は龍枯寺である。

吉田城址と練兵場跡地が面目を一新するのは昭和29年（1954）に戦災復興を記念して開催された豊橋産業文化大博覧会であった。現在吉田城址のシンボルとなっている鉄櫓くろがねやぐらはこの時のパビリオンの一つである。博覧会跡地には動物園、三の丸会館、テニスコート、市民体育館、市民プール、武道館、豊城地区市民館などが造られた。のちに体育館とプールは神野新田町に、動物園は大岩町に移転した。動物園のあった場所には市制70周年を記念して昭和54年（1979）6月に美術博物館が開館した。吉田城に関する古文書や什器などが最後の城主大河内家から寄託されている。



吉田城跡の動物園

これらの動きを受けて「市電」の「練兵場前」停留所は戦後「東八町」→「球場前」→「体育館前」→「豊橋公園前」と名前を変えた（現在の「東八町」停留所は戦前の「赤門前」と「旭橋」の間に当たる）。

（4）官庁街

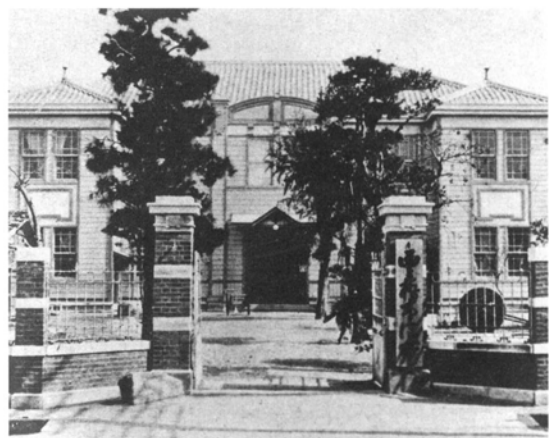
明治以後、郡役所・町役場（のち市役所）をはじめ種々の官公署と陸軍の施設が設けられたが、その多くは面積で半分以上（おおむね現在の国道1号線と県道4号線以北）を武家地が占める八町校区に造られた。昭和20年（1945）6月の空襲によりその多くは焼失

したが、戦災を免れた旧18聯隊の兵舎は一時豊橋市役所その他の官公署・諸団体の仮庁舎・事務所として利用された。

明治11年（1878）渥美郡役所が大手通りに設けられ、のち西八町（現八町通二丁目）に移転し大正15年（1926）までであったという（写真もある）が、諸説あり位置は定かでない。

明治22年（1889）豊橋町が誕生した時、町役場はまず八町に置かれ、2年後札木の旧吉田宿本陣の建物に移転したが、同34年（1901）には中八町にあった。当時の地図に「町役場」と表示されているのは現八町通三丁目の大手通り東側と思われる。吉田城当時の八町小路は明治中期と昭和中期と少なくとも2回拡幅されているので正確な位置を決めることは困難である。

明治39年（1906）の市制施行時、市役所はそれまでの町役場の建物を仮庁舎としたが、同45年（1912）西八町（現八町通二丁目、国民生活金融公庫豊橋支店のある付近）に庁舎を新築し移転した。昭和20年（1945）6月初めから耐火性にすぐれた市公会堂で執務しており、その直後の空襲のため本庁舎は焼失した。戦後は旧18聯隊兵舎に移り、同28年（1953）に現在の東館の位置に鉄筋コンクリート造3階の庁舎を新築、その後、数次の増改築を経て今の姿になった。



大正末期頃の市役所

市公会堂は昭和6年（1931）現在地に新築、



公会堂・火の見櫓・警察署（竹生節男 画）

ほとんどが低い木造建築の市中にあってその特徴あるスタイルは異彩を放っていた。その東隣には豊橋常備消防の建物が昭和8年（1933）に、市立図書館が同13年（1938）に、それぞれ新築された。消防の高い火の見櫓は遠方からもよく見えた。消防署は平成5年（1993）東松山町に、図書館は昭和57年（1982）羽根井町に移転した（現在はそれぞれ中消防署・中央図書館という名前になっている）。

公会堂の向かい、八町通りと大手通りの角（今は歩道橋の真下の軌道敷に当たると思われる）には日本勸業銀行豊橋支店があった。明治31年（1898）1月愛知県農工銀行の支店として設けられたが、昭和19年（1944）農工



農工銀行

銀行を合併した日本勸業銀行の支店となった。同37年（1962）店舗を神明町に移転したが、

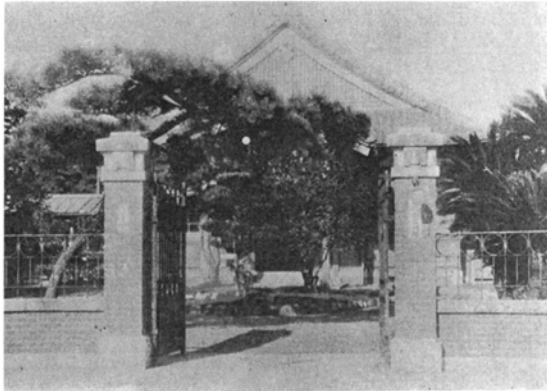
同46年（1971）第一銀行との合併により第一勸業銀行豊橋新川支店となり、その後駅前豊橋支店に統合された（現みずほ銀行）。

豊橋警察署は明治42年（1909）に札木町から中八町（八町通三丁目の現在地）に移転、木造2階一部3階建の庁舎は戦災を免れ、焼跡の街ではその望楼も目立つ存在であった。現在の庁舎は平成4年（1992）に新築されたものである。

その東、神明社の鳥居の西隣には昭和25年（1950）から同56年（1981）まで豊橋公証役場があった。明治42年（1909）に設けられて以来中八町、東八町、曲尺手町と移転した（第二次大戦末期から戦後にかけて一時中断）が、当校区内を離れることはなかった。その後市職員会館を経て駅前大通二丁目の開発ビルに移転した。戦後は公証人の交代により公証役場が移転することはなくなった。

中八町（現八町通三丁目）の練兵場前停留所の南（現在は国道と「くすのき通り」の交差点の南西角、ガソリンスタンドがある）には豊橋区裁判所があった。初めは愛知県第二区裁判所という名称で札木町の旧吉田宿本陣の建物に明治9年（1876）に設けられ、同13年（1880）中八町に庁舎を建てて移転した。昭和20年（1945）6月の空襲により書庫を残して全焼、戦後は東八町の旧陸軍偕行社の建物を庁舎とした。

昭和22年（1947）5月、日本国憲法の施行に伴い（三権分立の徹底）、検察事務と登記・供託の事務とを分離して名古屋地方裁判所豊橋支部・豊橋簡易裁判所となった（のち昭和24年（1949）名古屋家庭裁判所豊橋支部も設置された）。名古屋地方検察庁豊橋支部と豊橋区検察庁は旧練兵場の北東隅（現今橋町、県東三河建設事務所がある）の旧中部第61部隊の建物に移転し、名古屋司法事務局（現法務局）豊橋支局は裁判所の焼跡に庁舎を新築した。



裁判所

裁判所は昭和32年（1957）4月大国町の現在地（旧豊橋中学校の跡地）に移転し、検察庁も裁判所の東隣に移転した。法務局は同36年（1961）前田南町に移転した。平成3年（1991）検察庁の敷地に豊橋合同庁舎が新築され、これに検察庁のほか法務局・税務署・労働基準監督署など国の出先機関が集まった。

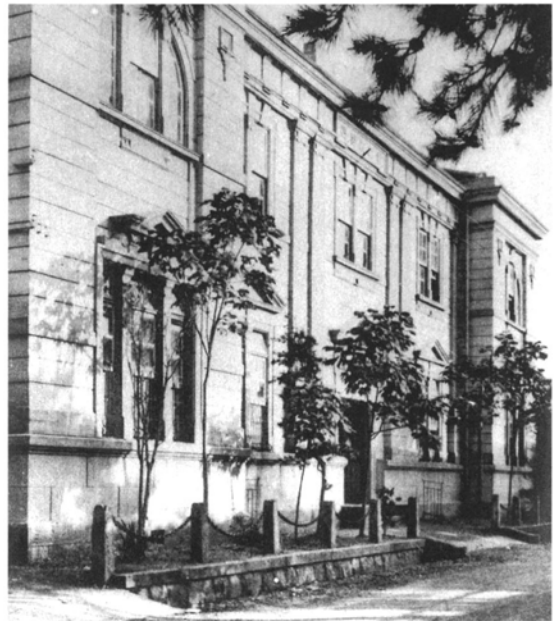
中八町の裁判所の北、神明社の中の鳥居の道を行くと豊橋**刑務支所**があった。設置は大正12年（1923）で、戦災により焼失、昭和26年（1951）に検察庁（当時）の北隣に新築、その後の改築を経て現在に至っている。交通事故の受刑者を収容して交通安全教育と職業教育を中心とした処遇が行なわれている。

八町小学校の西隣（現八町通五丁目、地域福祉センターがある）には豊橋**税務署**があった。税務署は当初愛知県収税部豊橋出張所として中八町に設けられた。明治29年（1896）、国税の賦課徴収が国の直轄事務に改められて豊橋税務署となり、同44年（1911）東八町に庁舎を新築し移転した。重厚な外観の明治の木造庁舎は戦災を免れ、昭和37年（1962）までこの場所で執務していたが、のちに吉田町（現前田町一丁目）に移転、さらに平成3年（1991）豊橋合同庁舎に移った。

昭和20年代に裁判所のあった旧偕行社の跡地には平成8年（1996）愛知県**東三河総合庁舎**が建てられ、県の主な出先機関として東三

河事務所、東三河県税事務所、東三河農林水産事務所、県教育委員会東三河教育事務所、東三河児童・障害者相談センター（もと児童相談所）などがある。

同じ時期に検察庁のあった旧中部第61部隊の跡地には愛知県**東三河建設事務所**、水資源機構**豊川用水総合事業所**がある。



税務署

(5) 牟呂用水

新城市一畝田で豊川から取水し、賀茂金沢地区に灌漑していた賀茂用水は明治29年（1896）に神野新田まで延長され、牟呂用水となった。渥美郡と八名郡との境の朝倉川をオーバークロスする掛樋には流量調節の装置があり、大雨の時にはここで水量を減らさないと舟原町や談合町のあたりで水が溢れたという。脇の道路の橋には境橋という名前があるが、掛樋から水が常時朝倉川に落ちていたので「ダーダー橋」と言われていた。今は仕組みが変わり、朝倉川に水が落ちることはない。

かつては各所に藤棚つきの洗濯場があり、夏場は子どもたちのプール代わりにもなっていたが、今はその光景も見られない。



富安昌也 画（『豊橋風景画集』=1951=より「ダアダア橋」）

「井ゼキの上にかがんである河童は僕に似ておないでしょうか。確かに僕らしいのです。四十年前のことです。僕はこゝの壊れた井ゼキで水泳ぎを覚えました。鰻やモロコや鮒や、そしてこの頃の子供では知らないであらうニガヒラを捕ったりしたものです。この井ゼキが壊れてさへおれば四十年前の風景そのままです。この画面から下流二丁の岸で僕は生れたのです。この井ゼキの水中にもぐつたりした四十年前のあわい感傷もまた楽しいものです。」

『豊橋風景画集』の富安氏のスケッチに添えられた河合陸郎元市長（八町小学校大正3年(1914)卒業）の一文である。



牟呂用水の洗濯場（談合町）
校区内にはこのほか旭町、西新町
などにもあった。

(6)「市電」

大正14年（1925）7月豊橋電気軌道株式会社（現豊橋鉄道）が駅前から「赤門前」（現東八町国道交差点西）までと、神明・柳生橋間に路面電車の営業運転を開始した。赤門前以东は道幅が狭く開通が遅れたが、同年12月に東田終点まで全通した。路線は駅前から北行し、右折して広小路通り・大手通り・八町通りを経て東田までの本線と、神明から田原街道（当時の）を渥美電鉄の柳生橋駅前に至るもので、全線単線であった（神明・練兵場前・前畑に行違いの設備があった）。23ページの写真で愛知農工銀行の前に写っている電車は営門前のカーブを大手通りに曲がる大正14年～15年日本車両製造の1型で、1号から10号までの10両が昭和時代前半まで全線を一手に引き受けて働き続けた。

昭和35年（1960）までは東田坂上から線路は道路とともに南寄りに折れていて、東田終点は現在の東田停留所の約150m南にあった。



八幡神社の「赤門」

校区内の停留所は、駅前方から営門前（戦後は公会堂前→市役所前）、練兵場前（戦後は東八町→球場前→体育館前→豊橋公園前）、赤門前、旭橋と前畑（現在は旭校区）であった。「赤門前」とは、八町小学校の南隣にあった八幡神社が道路に面して朱塗りの門を持っていたことに因むものである。戦後の復興都市計画による道路の整備に伴い現在の路線

となった。柳生橋支線は昭和51年（1976）に廃止された。

今日では幹線国道を通る路面電車として全国でも珍しがられる存在となっているが、これは昭和30年代前半（1950年代）に八町通りが国道1号となったため、明治初年からこの時までは旧東海道が国道1号であった。切替えの時期は今では国土交通省名古屋国道事務所でも分からなくなってしまっているが、この区域を含む豊橋市の区画整理事業の完了が昭和33年（1958）というから、恐らくこの時であろう。



西八町のカーブを曲がる市電100形（元1形）
自動車はまだ少なかった昭和32年（1957）頃は、このように大きなロータリーがあった。

第3章 教育と文化

1 学校教育・保育園

(1) 藩校・寺子屋時代

吉田藩校（巒）時習館 江戸時代の教育は、武士は藩校で、庶民は寺子屋や私塾で行なわれた。この藩校は、宝暦2年（1752）に藩主松平信復^{のぶなお}によって、八丁小路沿いの武家屋敷地内、三の丸御門に向かって左側、現在の豊橋市公会堂のあるあたりに設立された。

時習館は全国で約280校あったといわれる藩校の中で42番目の設立であり、尾張と三河では尾張藩校明倫堂に次いで2番目で、三河では最も早く設立された藩校である。

藩校は藩士の男子子弟に、漢学（素読・会読・講釈）と武芸（弓術・槍術・剣術・馬術・居合・柔術・砲術・軍学・騾方）及び万延元年（1860）から算術を加えて教えていたが、明治5年（1872）2月8日に120年の伝統を持つ藩校時習館は廃校となった。



時習館跡碑

寺子屋 吉田藩士の子弟が藩校時習館で文武の教育を受けたのに対し、庶民の子弟は寺子屋で教育を受けた。寺子屋の師匠は特定の資

氏名	期間	所在地
神宮寺	嘉永年間～明治5年	紺屋町（魚町）
恩田太惣太	天明年間～文化7年	曲尺手町（曲尺手町）
湖南拙庵	天保年間～明治5年	曲尺手町（曲尺手町）
花谷院	— ～明治5年	中世古（中世古町）
平石鼎	安政年間～明治5年	談合宮（談合町）
林佐一	文久年間～明治5年	下モ町（鍛冶町）
小島彦七	安政年間～明治5年	八丁小路（八町通）
鈴木友七	安政年間～明治6年	旭町（旭本町）
市川多賀作	安政年間～明治6年	旭町（旭本町）
青龍寺	安永年間～明治6年	飽海村（飽海町）

当時の八町校区付近の寺子屋一覧

格は必要なかったもので、相応に学識のあるあらゆる職業の者が寺子屋を開いたが、比較的学問があり、広い堂宇を持ち多くの人数を収容するのに適当だった僧侶がもっとも多かった。子供は大体7～8歳になると付近の寺子屋に入り、読み・書き・そろばんを習ったが、大部分は習字が主で、読書は従であった。そろばんを教える寺子屋はきわめて少なく、多くは別に“そろばん”として学んでいた。

(2) 八町小学校のあゆみ

小学校の創立まで 明治5年（1872）9月5日（旧暦8月2日）、近代国家建設の最重要施策の一つとして太政官布告第214号で全国に小学校を置く「学制」が公布された。これにより現在の豊橋市の大部分は「第二大学区第十中学区」（渥美郡と宝飯郡）に属し、いくつかの小学校を置く必要があった。吉田城下では前記のように江戸時代から寺子屋での

初等教育が普及していたが、太政官布告のとおり体制をすぐに整備することは不可能であったため、とりあえずいくつかの寺子屋のうち、中世古の花谷院など5つの寺子屋を「郷校」として対応した。

明治6年(1873)3月に「郷校」を悟真寺・龍拈寺の2か所に統合し、「豊橋義校」(悟真寺)・「豊橋義校分校」(龍拈寺)が発足した。通学区域を見ると、呉服町など大手通以東の各町と共に今の八町校区の大部分は龍拈寺の「分校」の学区であった。明治6年(1873)10月15日に「義校」の本校と分校は廃止され、第十中学区第一番小学関屋学校(関屋町悟真寺)、同中学区第二番小学□□学校(校名不詳 紺屋町神宮寺)、同中学区第三番小学立志学校(世古町龍拈寺)が発足した。このうちの第二番小学校は旧城内(武家地)八幡町以西と札木町・呉服町・世古町・魚町・利町・豊楽町・元浜町・清水町・元鍛冶町・紺屋町の10町を校区に持つ豊橋で最古の小学校の一つで、これが八町小学校の始まりである。

この学校は明治7年(1874)6月第十中学区第二番小学明道学校と改称し、旧時習館の跡地に移転した。この時の校区は八町・宮下町・川毛町・八幡町・袋町・札木町・呉服町・魚町・清水町・紺屋町・神明町等であった。

明治9年(1876)4月に小学校と学区の統合が行なわれ、この「明道学校」は第十中学区第四、五、六番小学八町学校と改称され、ここに「八町学校」の名称が生まれた。その後もたびたび新設・統廃合・改称が行なわれている。以下その名称の変遷を示す。

- ・明治6年(1873)10月
第十中学区第二番小学□□学校(神宮寺)
- ・明治7年(1874)6月
第十中学区第二番小学明道学校(時習館跡)

- ・明治9年(1876)4月
第十中学区第五、六番小学八町学校
- ・明治13年(1880)5月
渥美郡第一番小学八町学校
- ・明治17年(1884)5月
渥美郡第一学区小学八町学校
- ・明治20年(1887)4月
渥美郡尋常小学豊橋学校
- ・明治26年(1893)4月
豊橋町立第四尋常小学校(豊橋町大字八町)
- ・明治29年(1896)4月
豊橋町立第二尋常小学校(豊橋町大字東八町一現在地)
- ・明治32年(1899)4月
豊橋町立東部尋常小学校
- ・明治40年(1907)3月
豊橋市八町尋常小学校
- ・昭和16年(1941)3月
豊橋市八町国民学校
- ・昭和22年(1947)4月
豊橋市立八町小学校

この間、明治6年龍拈寺に開校した立志学校は、明治9年4月に第十中学区第七、八、九、十番小学吉屋学校と改称され、明治13年(1880)1月には廃校となって一部は八町学校に併合されたが、同時に飽海に渥美郡第五番小学飽海学校と旭町の稲荷社境内に渥美郡第四番小学旭学校が設置された。同年12月には飽海学校は廃止されて旭学校に併合された。明治17年(1884)5月に渥美郡第五区小学旭学校と改称され、明治18年に旭町に校舍を新築したが、明治20年(1887)4月、八町学校に併合された。

明治34年(1901)4月、新川町に南部尋常小学校が新設され、東部小学校、西部小学校から学区を編入した。当時の東部小学校の通学区域は、西八町・中八町・東八町・曲尺手町・鍛冶町・談合町・下町・西新町・東新

町・旭町・飽海町であった。

明治40年（1907）、南部尋常小学校は新川尋常小学校と改称し、明治42年（1909）に西八町と中八町が新川小学校の校区となった。創立以後のあゆみ—終戦まで 明治19年（1886）4月に「小学校令」が公布され、学校教育制度の基礎が固められた。この時の「小学校令」では尋常小学校4年、高等小学校4年の4・4制であった。さらに明治40年（1907）3月に「小学校令」が改正され、尋常科6年、高等科2～3年とし、義務教育を6年とした。前年の明治39年（1906）8月1日に豊橋市制が施行されたので、この「小学校令改正」と共に明治40年（1907）3月から馴染みのある豊橋市八町尋常小学校と改称された。

明治27年（1894）にはじまった日清戦争、明治37年（1904）にはじまった日露戦争を契機として国民意識が高揚すると共に、それまで50～60%台と低迷していた小学校への就学率も逐次上昇して、明治40年頃にはほぼ100%の児童が就学するようになった。また当時の豊橋市は製糸業が盛んであったので、就学児童が急増し、狭間・松山等の小学校の新設と共に八町尋常小学校の校舎も増築された。



新築前の校舎

大正2年（1913）4月には大きな窓で明るい教室の、木造二階建校舎が新築された。また大正9年（1920）10月に木造二階建校舎の第2棟が新築されて校舎の近代化が進むと共に、翌大正10年（1921）には講堂兼屋内体操場を新築し、校地の一部を拡張した。さらに

大正13年（1924）3月には、木造二階建校舎第3棟が新築された。



木造2階建校舎第2棟

八町校区には明治18年（1885）から歩兵第18聯隊があり、さらに明治41年（1908）に第15師団が高師に設置されてから、八町校区には軍人の家が多くなり、特に学校のまわりには軍人や役人の家が並んでいた。八町小学校には軍人の子弟が多く、軍人は転勤が多かったため在学する児童の転出入が多かった。

昭和3年（1928）5月、理科室が新築され、同年10月には天皇・皇后両陛下の「御真影」を奉納する奉安殿が竣工した。

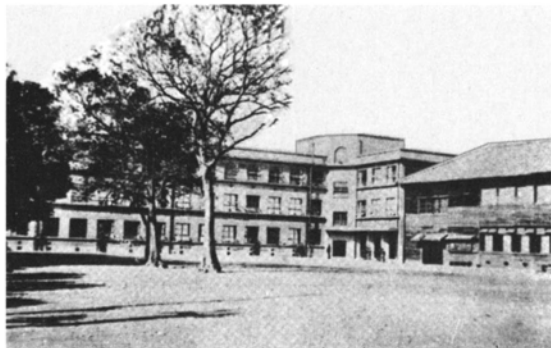
昭和4年（1929）4月末の在校生数は、当時西八町と中八町が新川校区であったにもかかわらず、1,232名であった。

昭和8年（1933）4月に学区の変更があって、八町小学校の学区は新川校区から西八町と中八町が再び戻り、東八町・曲尺手町・鍛冶町・下町・談合町・東新町・西新町・旭町・飽海町の11か町となった。



昭和6年当時の校舎と校門

昭和9年（1934）6月に鉄筋3階建校舎が新築竣工した。



鉄筋3階建校舎新築

昭和10年（1935）、青年学校令が公布され、同年10月から八町小学校にも市立の八町青年学校が併設された。

昭和16年（1941）3月に「小学校令」が改正され、「国民学校令」が公布された。これにより同年4月、豊橋市八町国民学校と改称された。同年12月8日に太平洋戦争が勃発し、本土空襲の危険が高まってきて、昭和18年（1943）12月には校舎の窓ガラスに、爆風による飛散よけの張紙を行なったり、翌19年11月から校庭の防空壕掘りを行なった。

昭和20年（1945）6月19日深夜から20日未明にかけて豊橋は空襲を受け、本校も鉄筋コンクリート校舎と奉安殿を除く木造校舎は全て焼失した。そして同年8月15日に終戦を迎えた。

終戦以後のあゆみ 豊橋空襲で家を焼失して四散したり、終戦で軍人が帰郷したりして、戦災直前の4月には1,643人いた児童は、終戦直後は200～300人と極めて少なくなり、焼け残った鉄筋コンクリート校舎の14教室で、合併授業をしたり、階段を使ったりしてなんとか凌いでいたが、戦後1年も経たない内に四散していた児童の多くが再び戻って来て、昭和21年4月には1,000人を超し、教室不足が深刻になったので、学校の約500m北にある元中部61部隊の兵舎を借り受けて分校とし

た。この分校は窓が小さくて昼間でも薄暗く、黒板もないような状態であった。

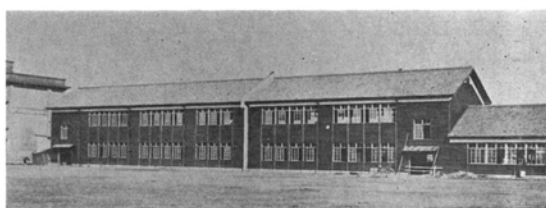
昭和21年（1946）、昭和天皇が東海地方巡幸の折、10月21日に八町国民学校で教育事情をご視察になった。学校長から戦災当時の状況やその後の教育のようすをお聴きになった後、全学級を熱心にご覧になった。



児童に話しかけられる昭和天皇

昭和22年（1947）4月に教育基本法・学校教育法が公布され、豊橋市立八町小学校と改称された。同時に6・3制が実施され、新制中学校が開校した。

昭和23年（1948）11月に木造校舎が完成し、分校は本校に統合された。同時に南側の民有地と赤門の八幡神社跡の一部が学校用地となり、運動場が拡張された。この時、11月5日から3日間「校舎復興祝賀会」が盛大に行なわれ、戦後第1回の校区体育祭が広くなった運動場で実施された。



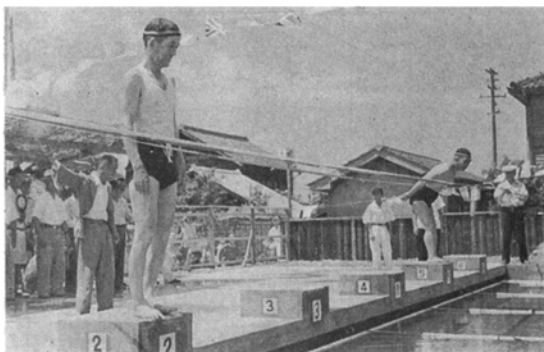
戦災復興した木造校舎

昭和24年（1949）3月に新しい校歌が制定された。

昭和27年（1952）4月に牟呂用水以西の西

脇町が東田校区から編入された。またこの年旭小学校が開校し、翌昭和28年（1953）4月の校区編成替えによって牟呂用水以東の東旭町・南旭町・東新町が旭校区へ編入された。なお、昭和33年（1958）9月に町名の変更がなされ、現在の町名となった。

昭和29年（1954）8月、市内の各校に先がけて、25m 6コースのプールが完成し、8月15日に盛大なプール開きが行なわれた。



プール開き

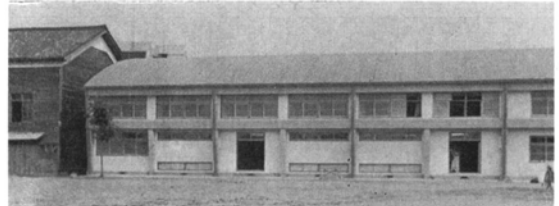
昭和30年（1955）5月に第4回東海レクリエーション大会が市公会堂で開かれ、本校が分科会会場となり、三笠宮殿下がご来校になった。

昭和35年（1960）4月に校舎の北側が約400m²拡張され、現在の姿になった。

昭和36年（1961）3月には鉄筋3階建の校舎が増築され、翌37年10月には体育館が完成した。また、昭和40年（1965）1月にその体育館の南側に岩石教材園ができ、理科の学習に役立てられることになった。

昭和46年（1971）3月に、終戦後間もなく建てられて老朽化した木造校舎の改築が行なわれることになり、鉄筋新校舎の第1期工事

が完成し、翌47年3月に第2期工事も完成した。



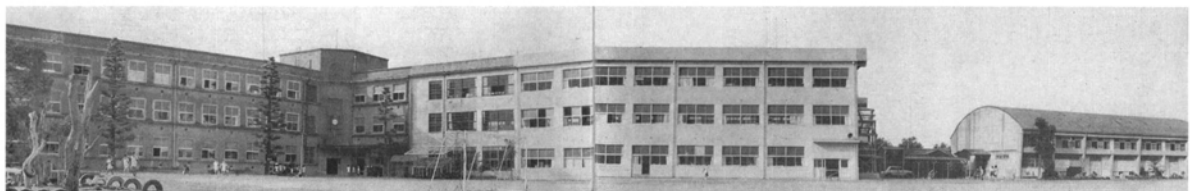
体育館完成

昭和47年（1972）10月には、明治6年（1873）10月に第十中学区第二番小学校として紺屋町神宮寺に誕生した八町小学校の創立100年を記念して、総代会・同窓会・PTAなどで「立志の誓」の記念碑、花壇づくり、「八町100年」沿革誌発行などの記念事業が進められ、10月8日に記念碑の除幕式と、愛知大学学長久曾神先生の記念講演を含む記念式典が盛大に行なわれた。



記念碑「立志の誓」

昭和58年（1983）頃、老朽化した西校舎（昭和9年竣工の鉄筋3階建）と体育館（昭和37年竣工）を撤去して校舎・体育館を新築する計画が進められ、昭和60年（1985）8月には市長、教育長を招き、同窓会員422名が



校舎全景

出席して「西校舎とお別れする会」が行なわれた。昭和61年（1986）2月から西校舎の撤去が開始され、3月には東正門が完工した。

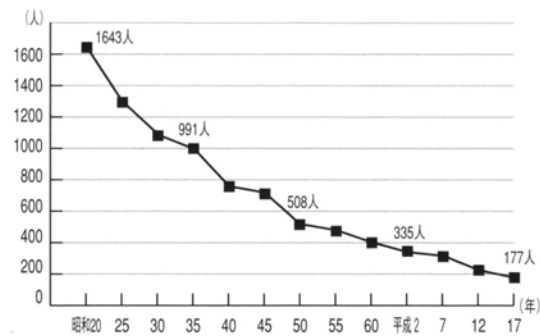
翌年3月から旧体育館の撤去が開始され、同月西校舎跡に2階建体育館が竣工し、その1階は八町校区市民館となった。

昭和63年（1988）3月に旧体育館跡に新校舎が完工して、ひととおりの改築が終了したのを記念して3月13日に記念碑「あすなるの塔」の除幕式と、校舎改築竣工記念祝賀式を行なった。



新体育館と記念碑「あすなるの塔」

平成15年（2003）には八町小学校の創立130周年を迎え、10月12日に記念式典を実施した。同窓会・総代会・PTAなどが記念事業として校旗の新調贈呈と、図書館の改造整備、図書の新調を行ない、卒業生のフジテレビ・エグゼクティブディレクターの杉田成道氏による記念講演があった。



八町小学校戦後児童数の推移

(3) 八町小学校の活動

太平洋戦争の終戦以前の本校区としての活動の記録は残っていない。

給食活動 昭和21年（1946）12月から学校給食が始まり、昭和24年（1949）9月には木造平家建給食室が新築され、同年11月に愛知県教育委員会から「給食状況優良校」の表彰を受けた。その後、機械購入などによって昭和29年には完全給食設備が整った学校として認められ、昭和36年（1961）3月には近代設計による給食室が完成し、教育計画の一環としての給食指導の研究を続け、その成果が認められて昭和39年（1964）10月に「学校給食優良校文部大臣賞」を受けた。

図書館活動 昭和29年（1954）2月東海3県学校図書館コンクールで参加賞を受けてから、先進校の参観などを行なって図書館の整備、充実をしてきた。その結果、昭和40年（1965）12月には第13回東海3県学校図書館コンクール東三河地区賞を受け、さらに昭和42年（1967）12月には第15回東海3県学校図書館コンクールで特別賞を受けた。平成15年の創立130周年記念事業で図書館は一層充実した。

仲よし学級 昭和34年（1959）からの新入児童のうち、情緒障害等のある児童を対象として特殊教育を施す学級が設置されることとなり、八町小学校は市内で最初の研究指定校となった。当初は情緒障害児童を対象とした1学級のみであったが、翌年には知的障害児童を対象とした学級も設けられ、その後、低・高学年の2学級となり「仲よし学級」と名づけられた。研究会・発表会も行なわれ、昭和57年（1982）11月12日には「生活に生きることばの指導」というテーマで特殊教育研究発表会が開かれた。「仲よし学級」2学級は平成17年度も継続して置かれている。

文集「わか竹」 昭和26年（1951）1月から「すくすく、すなおに伸びるように」という

願いを込めて、「わか竹」と名づけられた文集が、児童会の文化部が中心となって生まれた。現在も国語教育の一環として、先生方の編集によって毎年1回刊行され、平成16年3月で特集号も含めて53号まで発刊されている。



文集「わか竹」創刊号昭和26年（1951）

心の花づくり運動 平成1・2年に道徳教育研究指定校となり、心豊かな子の育成研究によって、平成4・5年には豊橋教育委員会から道徳指導指定校となり、「善行の花」「感動の花」「思いやりの花」「あいさつの花」の四つの花づくりを推進して、心豊かな人間味あふれた子どもの育成活動を行なっている。

(4) 高等小学校と中等教育

町立豊橋高等小学校 明治5年の「学制」による小学校設置以来、昭和22年の新制中学校開校まで、小学校の尋常科（初等科）、高等科の教育年数は制度の変化に伴っていろいろ変わったが、尋常科を卒業した児童のうち希望者は高等科に進んだ。明治14年（1881）10月、西八町に上等小学豊橋学校が創立された（当時の小学校は上等4年、下等4年であった）。この学校は明治20年（1887）4月に渥美郡立高等小学校、翌21年4月に渥美郡第一高等小学校、同23年6月に町立高等小学豊橋学校、同26年4月に豊橋町立豊橋高等小学校と改称され、豊橋町立第一～第四尋常小学校を卒業して高等科に進む児童の全てが通学した。その後、市制施行の明治39年（1906）には八町高等小学校となり、大正12年（1923）4月には豊橋市立実業補習学校が併設された。大正13年（1924）12月には豊橋高等小学校と改称され、翌年3月舟原に移転するまでこの地にあった。

豊橋尋常中学時習館 明治5年（1872）2月8日をもって廃校となった藩校時習館を惜しんで有志者がその伝統を守ろうと、旧時習館内に私費で成章義塾を開塾したが、あまり利



歩兵18聯隊の南に連なる諸学校

用されなかった。翌明治6年頃には旧吉田城二の丸に、私塾の好問社があって女子教育も行なっていたが短期間で閉鎖された。それから暫くの空白期間があったが、明治26年(1893)4月に、**私立補習学校時習館**が西八町に開設された。明治28年(1895)4月に、**町立豊橋尋常中学時習館**となり、三河で唯一の公立中学校が誕生した。そして翌年新川町に新校舎ができて移転していった。これが明治33年(1900)4月から県立に移管され**愛知県立第四中学校**と改称し、**愛知県豊橋中学校**、**豊橋高等学校**等を経て現在の**時習館高等学校**となった。

豊橋高等女学校 明治35年(1902)4月、西八町に**豊橋町立高等女学校**が創立された。



西八町校舎前面



旭町時代正門

明治40年(1907)豊橋市立高等女学校と改称し、明治44年(1911)12月に旭町に校舎が新築落成して移転した。大正4年(1915)6月には敷地内に寄宿舎も完成し、校舎の増築、運動場の拡張などが行なわれたが、昭和13年(1938)8月に向山町に新築移転し、その後、現在の**豊橋東高等学校**となった。

豊橋女子商業学校 豊橋高等小学校に併設されていた豊橋市立実業補習学校が、昭和2年(1927)4月に豊橋市立女子商業専修学校となり、昭和13年(1938)4月に豊橋市立女子商業学校と校名を変更し、同年9月旭町の豊橋市立高等女学校の校舎跡に移転して来た。昭和23年(1948)4月に豊橋実業高等学校・併設中学校となって向山町工兵隊跡地に移転した。移転後の旭町校舎には一時東田小学校が入り、昭和27年(1952)4月から旭小学校となっている。

豊橋裁縫女学校 明治35年(1902)4月に、私立の豊橋裁縫女学校が中八町に創立され、明治37年(1904)7月に東八町に移転した。昭和6年(1931)9月に豊橋高等裁縫女学校と改称し、昭和7年(1932)9月に瓦町に校舎が移転した。これが現在の**藤ノ花女子高等学校**である。

豊橋実践女学校 明治42年(1909)1月キリスト教精神を基調とした社会奉仕事業として裁縫塾が西八町に開かれた。大正13年(1924)4月、豊橋裁縫実習女学院と改称し、さらに大正15年(1926)1月に豊橋実践女学校と改称して東田町に移転した。戦後一時豊橋ハリストス正教会聖堂や、吉田城内の旧兵舎を仮校舎としていた事もあった。これが現在の**桜丘高等学校・中学校**である。

豊城中学校 昭和22年(1947)3月31日に6・3・3・4体系の学校教育法が施行され、4月1日から新制中学校が発足した。八町小学区は松葉小学区と共に旭町の豊橋市立女子

商業学校の一部を借用して設立された豊橋市立中部第二中学校へ通学することとなったが、同校は昭和23年（1948）1月に旧歩兵18聯隊兵舎に移転し、同年10月に校名を豊橋市立豊城中学校と変更し、校舎の増改築を行なって現在に至っている。

（5）その他の学校・幼稚園・保育園

豊橋盲啞学校 明治33年（1900）7月札木町に設立された豊橋盲啞学校が、明治34年（1901）12月中八町に移転し、さらに明治41年（1908）5月花田町に移転したが、大正9年（1920）11月旭町に移転し、昭和8年（1933）鍵田町に移転するまでこの地にあった。

飽海保育園 昭和19年（1944）4月、飽海町集会所に保育所として設立され、昭和47年（1972）3月に改築を行ない、昭和49年（1974）8月に飽海保育園として認可を受けて現在に至っている。

豊橋旭幼稚園 明治40年（1907）キリスト教旭町教会によって、旭町（旭小学校東側）に設立された旭幼稚園は、戦後大国町に移転し、現在は向山町の豊橋旭幼稚園となって、平成19年（2007）には創立100周年を迎える。

仔羊幼稚園 昭和28年（1953）八町のハリストス正教会に仔羊幼稚園が設立され、幼稚園馬車が人目を引いていたが、昭和40年、現在地の岩田町に移転した。



仔羊幼稚園の馬車

小百合幼稚園 第2次世界大戦の頃まで、中八町の警察署の向かい側のキリスト教会に付設された小百合幼稚園があって、付近の幼児が通園していたが詳細は不明である。

光幼稚園 昭和27年（1952）10月17日旭町に光幼稚園が設立され、現在に至っている。

2 八町校区の活動

（1）体育活動

昭和47年（1972）に八町小学校創立100年を記念して発行された記念誌「八町100年」には、明治後期の小学生の体操風景をはじめ大正期に児童の体位向上をめざして数多くの研究会や講習会が開かれて「スウェーデン体操」や「デンマーク体操」が紹介され、体育器具も利用され始めたことが書かれている。さらに大正期の「少年野球部」も掲載されており、体育も海外のものを取り入れ、近代化を目指していたことがうかがえる。

豊橋は明治18年に歩兵第18連隊の駐屯地となって以来、八町校区を中心に多くの軍の施設があった。昭和に入り満洲事変、日華事変が発生し、体育も訓練、鍛錬に変化していったが、戦争終結により軍の施設は撤去され、その跡地が公園や体育施設として整備され始め、昭和23年には豊橋球場が出来、陸上競技場、相撲場、市民プール、テニスコート、武道館が順次建設され、八町校区は豊橋のスポーツ会場の中心となった。

八町小学校の運動場も昭和23年に拡張されて、第1回校区体育祭が行なわれた。野球部は「豊橋球場開き記念大会」で優勝、昭和26年（1951）には春秋大会ともに優勝した。

平成元年（1989）に総合体育館が神野新田地区に移転するまでは体育館も陸上競技場の西側にあり、当時としては巨大な7,000人収容の施設として、室内競技はじめ各種の催しに

使用された。これらの施設は豊橋公園の東側に集中しており、競技会や集会、歌謡ショー等が開かれ、市電の停留所も「体育館前」と称し、特に休日には各種の競技大会が開催され賑わった。昭和25年（1950）には陸上競技場は「第5回愛知県豊橋会場」にもなった。

このような環境の中で昭和29年（1954）8月八町小学校にプールが完成し、翌々年には豊城中学校にも完成した。当時八町小学校には体育館がなく、昭和37年（1962）に体育館が建設されるまでは全校集会は屋外で行なわれ、卒業式等では教室間の仕切りを取り外して式場とする有様であった。当然体育の授業は屋外がほとんどで、ドッジボールやソフトボール等が行なわれていたが、ルールも独自のもので遊びの延長に近いものも多かった。プールが出来てからは体育の授業としての体裁も整って来て、泳げる距離に応じて級の認定をして技能向上を図ることもできるようになった。プール、体育館はその後改築され、現在はともに2代目となっている。

小学校のクラブ活動ではサッカー部の活躍も大きく、昭和43年（1968）から3年間は全市大会で3連覇、昭和45年（1970）には東海地区大会で3位に入賞した実績を持ち、現在も活躍中である。

運動会は、かつては学校の行事として行なわれて父兄は参観するだけであったが、少子化が進み、各町の体育委員が主体となり、校区全体の行事として町内対抗競技も行なわれるようになり、校区最大の行事となっている。

校区には軟式野球スポーツ少年団（市内57団が加盟）で活躍する「八町レッズ」をはじめ各種のスポーツ団体がある。「八町レッズ」の結成は昭和54年（1979）で、毎年豊橋少年軟式野球連盟の大会に出場するなど活躍している。平成17年（2005）11月現在の所属部員は37名である。

昭和42年（1967）にはママさんバレーチームも結成された。現在は「ソフトバレー」「八町バレー」等が結成され、各種の大会に出場している。

身近なところでは、毎年夏休みに総代会と子供会の主催で八町小学校の校庭を会場として朝のラジオ体操を行なっている。参加者の年齢層は小学生を中心に幼児から年輩者まで幅広く、年齢に関係なく参加証を発行し、年中行事の一つとして親しまれている。



朝のラジオ体操（2005.7.24）

（2）市民館活動

八町校区には豊城地区市民館と八町校区市民館がある。豊城地区市民館は昭和55年（1980）5月5日に市内で15番目の市民館として開館した。床面積は753㎡で、建設費用は1億540万円であった。大集会場、図書談話室、調理実習室、和室等を備え、完成以来校



第26回豊城地区市民館まつり（2005.11.12）

区の成人式、市民館祭り等が毎年盛大に行なわれている。また校区民は言うに及ばず、校区の範囲を超えた各種の集会や催しに利用されて来た。広域的な利用例には市内の各種団体の打ち合わせや「フラワーアレンジメント」「親子ふれあい教室」等の市民館講座があり、さらにエアロビクス、カラオケ、英会話等の自主グループ活動に利用されている。



第26回豊城地区市民館まつり（2005.11.12）

また防災の面でも一次避難所の指定を受け、防災無線や非常用の備品も常備されていて、いざという時に備えている。

八町校区内にはさらに身近な存在として校区住民の集会や文化活動に利用されている八町校区市民館がある。豊城地区市民館より7年後の昭和62年（1987）4月1日に竣工した。施設は舞台付きの和室のほか和洋の会議室、研修室があり、調理実習室は豊城地区市民館ほど大きくないがガスレンジなどの調理器具が設置されている。現在定期的に利用している代表的なグループには「てまり会」「ソーシャルダンス」「藤の会」等があり、利用者の多くは校区在住者で、名実ともに校区市民館としての役割を果たしている。その他不定期に使用されることも多く、利用回数は平成16年（2004）度では年間で会合、研修、実習等を合わせると1,265回（グループ）の実績となっている。防災に関しては豊城地区市民館と同様一次避難所に指定されており、八町小学

校に併設されている関係から体育館や運動場など学校の施設と一体として使用でき、災害発生時に校区民が頼るべき中心的施設である。また不定期ではあるが選挙の時は校区第二投票所にも利用され、校区のコミュニティーセンターとなっている。

両市民館とも日常の活動として利用促進や催し物のPRのため毎月館長や各職員の編集作成による「市民館便り」を発行しており、各町内会を通じて校区の全世帯に回覧され利用されている。

（3）交通安全活動

豊橋市では昭和37年（1962）2月1日に交通安全都市推進協議会が発足し、市役所内全生活課に事務局を置いた。総代会や老人クラブ等の各種団体、学校、企業が参加し（平成17年度39団体）、交通安全市民運動として春・夏・秋・冬の交通安全運動や交通安全教育を実施している。校区としては各町の総代と役員が、年4回の交通安全運動期間中毎朝7時50分からと夕方5時から中日新聞社前と東八町五差路の2か所に立って監視と指導を行なっている。



交通安全教室

八町校区老人クラブは、高齢化の中での交通安全を推進するため行なわれている「豊橋市交通安全高齢者の集い」に昭和63年（1988）頃から積極的に参加し、また毎年行なわれて

いる八町老人福祉大会において交通安全事故防止について「申し合わせ事項」をあげ啓蒙活動を行っている。

八町校区子ども会と八町小学校は、悲惨な交通事故から子どもを守るため、豊橋警察署の協力を得て交通安全教室を開催し、正しい交通ルールを身につけるよう、一体となって取り組んでいる。豊城中学校では、自転車による交通事故が多いことから、先生方が陸上競技場の南東角の三差路で立ち番を行ない、登校時の交通安全指導をしている。



八町小ふれあい集会

(4) 青少年健全育成活動

青少年の健全育成と非行防止には学校や警察だけでなく、地域ぐるみの対応が必要であるという見地から、まず中学校区からの組織づくりが昭和50年（1975）頃から始まった。豊橋市では昭和57年（1982）6月末、全市的組織として豊橋市校区青少年育成会連絡協議会が発足した。校区としては昭和62年（1987）11月8日に八町校区健全育成会が発足し、以来総代会会長は会長の任につき、今日に至っている。校区での主な事業は、子育て講演会、お年寄りとのふれあい、親子音楽・演劇鑑賞会があり、「育成会だより」を年5回発行している。特筆すべきは毎年度末に児童の善行表彰を行なっていることである。

これは発足当初より20年近く行なわれていることで、他の校区では見られない。「あいさつの励行」「善い行い」「奉仕的な活動」等といった小さいことを含めて、この善行表彰は子供たちに自信と勇気を与え続けている。

豊城中学校区青少年健全育成会は昭和57年（1982）6月2日に発足した。総代会は松葉校区と協力して会の運営に携わり、今日に至っている。豊城中学校ではこの会の事業の柱として地域連帯教育を実施しており、地域住民と接し指導を受けることで、地域に親しみながら学校生活では得られない社会生活に必要な知識・礼儀・作法などを習得することをねらっている。その一つが秋に行なわれる豊城祭の中で昭和62年（1987）以来行なわれている「地域の文化に親しむ会」で、地域のスペシャリストを招いて十数種の文化教室を開き、地域の文化や伝統を学んでいる。さらに本年で4年目になる2年生の職業体験学習では、校区をはじめ市内の商店・企業など100を超える事業所の協力を得て、キャリア教育を行なっている。なお、「育成会だより」を毎年発行している。

(5) 防犯活動

八町校区内13町では原則として各町2名総計25名の防犯委員が選出され、八町防犯委員会を運営している。年度初めの打ち合わせをスタートに、6月には豊橋公園で行なわれる夜店のパトロールを実施し、7月～2月の8か月間は月3回、午後8時から9時まで蛍光塗料付のグリーンのベストを着用して、防犯灯のチェック、不審者チェック等の校区内パトロールを実施している。その他防犯立看板の取替え、校区体育祭の立看板の設置、豊橋まつり時のパトロール、「地域コミュニティー」、防犯活動講演会を実施している。

八町校区内での犯罪発生件数は郊外地区に

比べると少ないが、平成17年（2005）1月から8月までの間に強制わいせつ1件、住宅侵入盗4件、自動車盗1件、オートバイ盗1件、車上ねらい3件、自動車部品ねらい2件、自動販売機ねらい7件が発生している。市内全体を見ても犯罪件数は平成7年度4,026件から平成16年度9,760件と増加している。

八町校区で多い住宅侵入盗のうち約60%は一戸建て住宅が対象であり、全体の80%は窓からの侵入で、その49%がガラス破り、残りが無締りである。無締りが多いのは過去に犯罪が比較的少なかったため住民の多くがのんびりと構えていたためと考えられる。

(6) 防災活動

国の防災会議では平成13年（2001）12月に東海地震に関する最終報告書を取りまとめた。これによると想定震源域は従来よりも西に拡大し、豊橋市をはじめ愛知県内の市町村が「震度6弱以上が想定される地域」に含まれることとなり、平成14年（2002）4月には豊橋市は「地震防災対策強化地域」に指定された。これを受けて同年8月「八町校区自主防災連絡協議会」を開き、校区自主防災実施計画をまとめ、校区防災マップを作成し、同年10月には第1回八町校区自主防災訓練を実施した。地震発生の想定で400名の参加者は避難場所である八町小学校体育館に集合して阪神・淡路大震災時の淡路北淡町の災害記録を見学し、グラウンドで町消防団の消火訓練を見学し、消火器の操法・応急手当の指導を受けた。

平成15年（2003）12月、豊橋市は「東南海・南海地震防災対策推進地域」に指定され、より一層の防災対策の強化が求められた。第2回八町校区自主防災訓練を同16年（2004）11月に実施、八町小学校に校区防災対策本部を開設した。参加町民450名は各町の避難場

所に集合した後、八町小学校に集まり、各町の防災会長は避難人数、防災状況等を対策本部へ報告し、本部は災害状況の集計を行なった。グラウンドで八町消防団の消火訓練を見学し、消火器の操法・炊出し等の指導を受けた。

3 八町校区の史跡・文化財等

(1) 神社・仏閣・教会

安久美神戸神明社 社伝によると天慶2年（939）平将門の乱の時、勅使を伊勢神宮に派遣して乱の平定を祈願したところ靈驗あらたかであったので、朱雀天皇により安久美（飽海）の郷が神領地として寄進され、この地に天照大神が祀られたとされる。創建当時の場所は不明であるが、今橋築城に際し明応6年（1497）に社殿が改築された。その時から城内神明宮、吉田神明宮と呼ばれ、城の鎮護の神として崇敬されることとなった。徳川家康の時代には朱印状により三十石の社領が与えられた。社殿のあった所は朝倉川沿いの現在の野球場のバックネットの後方のあたりで、門前から武家町を南へ曲尺手門に至る道が「神明小路」である。

明治18年（1885）この区域一帯が陸軍用地となり、練兵場が造成されるについて中八町（現八町通三丁目）に遷座した。後年の空襲の時も焼失を免れて現在に至っている。大正末期から昭和の前半にかけては「県社神明社」が公式社名であったが、昭和26年（1951）に現在の社名に改められた。

古くからの農民の田楽踊りに起源を持つという「鬼祭」は早春の豊橋の風物詩となっている。

八幡神社 赤門のお宮・八幡神社は吉田城の時代には武家地の北端、朝倉川沿いの神明社の東隣にあった（その門前から南に延びていた「八幡小路」の一部が先年発掘された）が、

練兵場の造成に伴い明治18年（1885）神明社と同時期に東八町に遷座した。祭神は応神天皇であった。なお、境内には同じく武家地の北端にあった秋葉神社も遷座していた。後年北隣に八町小学校が移転して来た。

戦災で赤門を含めて全焼し、再建を見ることなく昭和21年（1946）中八町の神明社に合祀された。跡地の北半分は八町小学校の敷地と道路、南半分は滝川病院の敷地の一部になっている。神明社の「秋祭」は八幡神社の祭礼が10月10日であったことに由来する。

正一位秋葉神社 慶安元年（1648）現在地（東田町西脇二区）に建立された。火事は人の力ではどうすることもできないということで火を鎮める神「火産靈神」^{ほむすびのかみ}が祀られたものである。

談合神社 南北朝の乱（14世紀）の後、南朝の遺臣がこの地方にも各所に住み着いたと言われているが、その中の大木氏、富田氏、平石氏などが牧野古白の牛久保築城に関わり、今橋築城に伴いこの地に入って刀剣や城の金具を製造した（鍛冶町の由来）。その頃、金属を鑄造する工房のそばに鍛冶屋の神様を祀ったのが起こりという。記録には天照大神を東田神明社から勧請した（東田神明社は飽海の神明社から勧請された）とされ、一党の平石氏の郷里河内国富田林から磐船神社の祭神を勧請し、合祀したとの記録もある。一党がひそかに会合して南朝の再興を謀ったことから「談合宮」と呼ばれるようになったという伝承で、大和の「談山神社」の由来（こちらは7世紀の大化改新）に通じる名前である。

社殿は戦災で焼失したが、氏子ほか有志の尽力により昭和30年（1955）に再建され、同45年（1970）には鉄筋コンクリート造の拝殿が完成した。

青龍寺 元禄元年（1688）飽海村の現在地に建立された真言宗の寺院で、ある時本尊がひ

とりでに光を放って輝いたという伝承がある。江戸時代には寺子屋も開かれていた。

豊橋ハリストス正教会 明治の初め豊橋にもギリシャ正教が伝わり、当初八町通南側に会堂があったが、大正2年（1913）、現在地に今もある聖堂が建てられた（大本山は神田のニコライ堂）。観光名所として有名な函館の会堂と同じ河村伊蔵（設計担当聖職者）の設計によるが、建築は函館よりも1年古い。堂内のイコン（聖画）の中には著名な聖像画家山下りん（1857～1939）の筆になる「ハリストスの降誕」「主の昇天」の2枚がある。愛知県下のキリスト教の教会堂では最も古く、昭和58年（1983）豊橋市の、翌59年（1984）には県の有形文化財（建造物）に指定された。

（2）建造物・碑等

秋葉山常夜灯 安永8年（1779）の大火（本町から出火して町屋から武家屋敷まで焼けた）の時、札木の大金持の植田七三郎方が火元に近いのに不思議なことに何の被害もなかったのは、日頃信心している秋葉大明神のおかげであろうと評判になり、文化2年（1805）、東惣門の東に石造りの常夜灯を建てて吉田中の安全を祈願した。第2次大戦中に地震で倒壊したうえ空襲で焼損し、一時期無残な姿を



復元された秋葉山常夜灯

さらしていたが、のちに豊橋公園内に建て直され、平成13年（2001）元の場所より約50m北の東八町交差点北側に復元された。

神武天皇の銅像 明治27・28年（1894・95）の日清戦争で勲功を立てた十八聯隊の凱旋を記念して戦死者を顕彰する運動が有志の間に起こり、募金が行なわれ、明治32年（1899）3月に地上高さ15mに及ぶ記念碑が完成した。城郭の石積みのような巨大な台石を築き、頂上には伝承上初代の天皇とされる神武天皇の銅像が安置され、台石には明治維新から日清戦争に至る戦死者・戦病死者の氏名を刻んだ銅牌が付けられていた。建てられた場所は練兵場から道路を隔てた南の東八町の民有地（現八町通四丁目、三菱東京UFJ銀行の文書倉庫がある）で、除幕式当日は招魂式のほか宴会や余興もあり、豊橋町を挙げて祝祭気分だったという。

神武天皇像は刀剣を帯び、左手に弓を持ち、背には矢を負う古代武人の姿で、顔は明治天皇に似せたという。上野の西郷隆盛像や皇居前の楠木正成像と同様日本美術院の岡崎雪声を主任として鑄造された。原型の制作者は、八町小学校出身で東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業した松田鹿三であるとされている。

この銅像は大正5年（1916）練兵場の中央北隅（現在の野球場バックネットの背後、神明社の旧境内地と推定される）に移され、分列行進を閲兵する形で30年間を過ごしたが、敗戦後、一部の有志が解体し、分散して一時所在不明となっていた。その後、丸地古城（幸之助）氏が苦心して部材を回収し、昭和40年（1965）に吉田城址の金柑丸（三の丸会館の西、豊城神社跡）に復元した。建立当初の城郭風の石組みも、練兵場当時にはあった台座も今はないが、全体に低くなっただけ明治美術の遺産を細部まで見ることができる。



神武天皇銅像

山田宗徧邸宅跡 県東三河総合庁舎の西北、豊橋公園の児童遊園地入口の付近に碑が立っている。茶道宗徧流の開祖山田宗徧は小堀遠州に師事し、後に千利休の孫、宗旦に学び、茶道の奥義を究めた。吉田城主小笠原忠知は当時の茶道の華美に流れるのを憂えて千宗旦を吉田に招いたが、高齢の宗旦は愛弟子宗徧を推挙した。明暦元年（1655）、宗徧は29歳で小笠原家の茶頭となり、忠知以下4代の城主に仕える傍ら、藩士庶民の別なく利休正流の侘茶の道を広めたという。

中村道太の碑 吉田城址の本丸入口西側にあり、昭和37年（1962）に建てられた。道太は幕末に吉田藩士の家に生まれ、維新後初代渥美郡長を務めたほか、上京して福沢諭吉とも親交を結び、第八国立銀行創立者・横浜正金銀行初代頭取・明治生命発起人等を務め、明治の中央経済界で活躍し、大正10年（1921）に没した。

小栗風葉文学碑 風葉の小説「青春」の一節を刻んだ碑は、昭和51年（1976）豊川を見下ろす石垣の上に建てられたが、後年すぐ前に三の丸会館が建てられたため会館の裏に隠れた形になった。

風葉の本名は磯夫、明治8年（1875）半田の小栗家に生まれ、豊橋松葉町の加藤家の養子となった。尾崎紅葉の高弟で、紅葉の没後「金色夜叉」を書き継いだというエピソードもある。

大正15年（1926）没。邸宅「留月荘」は花田町にあったが空襲で焼失した。箒子夫人も文才に恵まれ、松操高女で教鞭も取ったが、昭和31年（1956）に没した。



小栗風葉文学碑

富田良穂の歌碑 「三河なる二葉の松の生立て今やときはの色にいつらむ（いずらん）」

嘉永元年（1848）生の吉田藩士で、国学者小野湖山・平田鏡胤に師事し、豊橋町助役、県議会議員、豊橋市収入役を歴任した。歌誌「さとのひかり」を創刊、三河の歌壇に貢献し、大正14年（1925）に没した。碑は吉田城址二の丸にある。

富安風生の句碑

「萬歳の三河の国へ帰省かな」

吉田城址金柑丸入口に昭和51年（1976）に建てられた。風生（本名は謙次）は明治18年（1885）八名郡金沢村に生まれ、逓信省の局長、次官を歴任し昭和54年（1979）に没した。高

浜虚子に師事し、自らも句誌「若葉」を主宰、「草の花」「村住」「朴若葉」「晩涼」「古稀春風」「富士百句」などの句集がある。



富安風生の句碑

四警官殉職の碑 昭和41年（1966）10月12日夜の集中豪雨の中、朝倉川流域住民の救助に向かい濁流に巻かれて殉職した鈴木輝男・松井正・梅田常吉・山本欽一の4警官の勇氣と功績をたたえるもので、昭和42年（1967）に朝倉川畔（旧市民プールの近く）に建てられた。

(3) 伝統行事・芸能等

鬼祭 農民が豊作を祈願して田楽を踊っていたのが年々繰り返されているうちに神社の行事となって伝承されたといわれ、高天原神話の荒ぶる神と武神との闘いと和解の筋書が赤鬼と天狗の「からかい」として表現されている。社伝によれば徳川家康がまだ幼い頃、鬼祭を見物したという（腰かけの松）。昭和29年（1954）愛知県無形文化財に、同55年（1980）国の重要無形民俗文化財に指定された。

神社の例祭は旧暦正月13・14日に行なわれていたが、明治末年から新暦2月14・15日に変わり、2月11日が休日と定められた翌年の昭和43年（1968）から10・11日に改められた。

数日前からの神役の潔斎に始まり、岩戸舞、青鬼、子鬼、黒鬼、神事祭、浦安の舞、御的の神事、年占御玉引、天狗の切祓と神楽、司

天師の田楽と神楽、ポンテンザラの田楽など多くの神事や行事が次々と行なわれる。赤鬼と天狗の「からかい」は11日午後2時から神前で始められ、天狗に追い詰められた赤鬼は境内から逃げ出してタンキリ飴をまき散らしながら氏子の町々を駆けまわる。タンキリ飴をかけられた人は夏病みをしないとされる。赤鬼の一行は「お旅所」の談合神社に立ち寄り、ここでも神事が行なわれる。街々は夜の更ける頃静かになる。

吉田文楽 本来、文楽とは大坂の文楽座で上演される人形浄瑠璃をいう。浄瑠璃に合わせて操り人形を使う人形浄瑠璃は淡路島など西日本各地に土着芸能として多く見られるが、飽海でも行なわれていた。江戸末期に大坂の人形遣いが来て祭礼の余興に人形芝居を指導したのを契機に飽海・牛川の人々が一座を起こし東三河の各地を巡業したと言われている。京都から戦さを避けて逃げて来た人々が木や土を材料として人形を作っていたともいう。現在飽海には「かしら」数十個が保存されている。

たびたび衰退の危機に見舞われたが、地元保存会の懸命の努力により近年は定期公演も行い、後継者の養成に努めている。平成2年(1990)には豊橋市の無形民俗文化財に指定された。



吉田文楽

4 八町校区ゆかりの人物・伝承等

(1) 校区に縁のある作家

丸山 薫 (1899~1974) 現代詩の大家・丸山薫は九州大分で生まれ、豊橋で没した。幼時は内務省の官吏であった父の転勤に従って各地を転々としたが、明治44年(1911)小学校5年生の時に父の死により母の実家に移り、八町小学校に転入、県立第四中学校(現時習館高校)から東京高等商船学校(現商船大学)に進んだが、のち三高・東大へと進路を変えた。八町小学校に通ったころ住んだ祖父の屋敷は瓦町にあったという(越境通学か、当時すでに東田小学校があった)。

昭和23年(1948)豊橋に帰り、一生を終えるまで三四子夫人とともに多米町蟬川(現東小鷹野三丁目)に住んだ。

井上 靖 (1907~1991) 「天平の甍」など多くの作品を残した作家井上靖は、幼時の思い出を記した「魔法塚」や「しろばんば」の中で6歳の時と8歳の時に一緒に暮らしていた祖母の家から両親の家(「立川町仲八町71番地の1」)にあった)を訪ねたという趣旨のことを書いている。父親は陸軍の軍医であった。吉田城の外濠の跡といわれる中八町と曲尺手町との間の小路を通称「立川町」と言ったので、おおよその見当をつけることはできる。一説には「^{かんいん}官員世古」(通称。役人の住む小路という意味で、立川町から大手通りに抜けていた)であったとするが、そうであれば現在は国道1号の南側ということになる。

(2) 民話と伝説

片身のスズキ 昔、吉田の里に五郎という漁師が住んでいた。毎日、豊川で漁をして生計をたてていたが、ある時期、小魚一匹釣れぬ日が続いた。不思議に思いながら釣りを続けていた9日目の朝、五郎の竿が大きくしなっ

た。びっくりするほどの手応えだった。「お前のせいだな、ここところ、魚がみんなどこかへ行ってしまったのは。逃がしはせんぞ」と、息巻いた五郎は、激しい戦闘のすえ、これまで見たこともない大きなスズキを釣りあげた。

五郎は、この立派なスズキを「お殿様に召し上がっていただく」と、吉田の城に届けた。ところが城の料理番がそのスズキを刺身にしようと、片身をそいだとたん、大きく跳びはねてお城の裏の豊川に飛び込んでしまった。

片身のスズキはそのままお城下の豊川に棲みつき、主ぬしになった。それから、この付近で人が溺れ死ぬと「片身のスズキに引っ張りこまれた」とか「片身のスズキの恨みを受けて死んだ」とか言われるようになった。



小学6年生のカット

さくらもといなり
桜下稲荷のキツネ 昔、旭町の桜下稲荷（現在の旭小学校の北隣にある）に棲みついていたキツネは、供え物が少ないと腹を立て、きれいな娘に化けて出て、近くの田畑で働いている人々をだまして新町あたりの店に連れ込み、てんぷらなどをたらふく食べて逃げたという。



小学6年生のカット

白へびの松 八町通四丁目、今は国道となっている八町小路の北側に大きな松の木が生えていた。昔このあたりは武家屋敷であった。

ある時、その屋敷で働いていた娘が主人の怒りに触れて斬り殺された。娘は「七代崇ななってやる」と言い残して息絶えた。そのことがあってから屋敷内の大きな松の木に白へびが棲みつき、主人は若死わかしにした。その後、へびは茶坊主ちやぼうしゅに姿を変えて現れるようになった。

その屋敷には崇りが何代も続き、医者いしやの一家が住んでいた時、ある晩その家の子供が便所に行く途中、松の枝に小さな茶坊主が腰かけているのを見た。茶坊主は枝から枝へと飛び、ニヤリと笑って子供を目がけてフワッと飛んで来たので子供は驚いて気を失い、高熱を出して、うわごとを言い続けながら死んでしまった。不審に思った親の医者がこの松を見張っていると真夜中に茶坊主が現れた。それから間もなく医者も熱病で亡くなり、それからはこの屋敷には誰も住まなくなった。

後年、市内電車が通ることになり、この松の木は伐り倒されることになったが、木に手をかけた者は腕や足を折るなど大けがをした

ので、東京から腕のいい職人を呼んで伐らせようとしたが、その職人も木から落ちて死んでしまった。それ以来誰言うとなく「この木に手をかけると白へびの祟りがある」という噂が広まった。

この木は昭和20年（1945）の空襲で焼けてしまった。



小学6年生のカット

引用・参考文献一覧

- ・豊橋市史（1973～）
- ・とよはしの歴史（1996）
- ・伊藤郷平 地方都市の研究—新しい豊橋—（1954）
- ・日本地名大辞典23愛知県 角川書店（1989）
- ・吉川利明 豊橋の町名の変遷（1976）
- ・八町100年（1972）
- ・郷土豊橋 札木町四百年 札木町内会（1998）
- ・兵東政夫 歩兵第十八聯隊史（1994）
- ・近藤恒次 明治初期に於ける豊橋地方の初等教育（1940）
- ・近藤恒次 時習館史（1979）
- ・ひがし写真70年史（1970）
- ・目で見る東三河の100年 郷土出版社（1972）
- ・ふるさとの思い出写真集「豊橋」 図書刊行会（1980）
- ・安久美神戸神明社と特殊神事鬼祭（1970）
- ・談合宮と南朝遺臣（1975）
- ・白雲山神宮寺誌（1985）
- ・八町子ども風土記（1994）
- ・豊橋の民話「片身のスズキ」（2006）
- ・東海日日新聞
- ・東愛知新聞
- ・豊橋美術博物館所蔵写真資料

編 集 後 記

2年半の「すりあわせ」の末、ようやく校区史らしきものの形が見えて来ました。編集委員に歴史の専門家は1人もいませんが、論文としてではなく校区の皆さんに気軽に読んでいただくには、しろうとの手でまとめてみることに意味があると考えました。しかし史料の集積があるわけでなく、時間の制約もあって、当然参照しなければならないものを見落としているかも知れないという懸念をぬぐい去ることができません。今後この小冊子を「たたき台」として郷土史の掘り下げが続けられることを祈る気持であることをまず申し上げたいと思います。

吉田城について分かっていることだけでも綴れば分厚い単行本が優に1冊出来上がるでしょうし、江戸城松の廊下の事件を告げる赤穂の使者が駆け抜け、幕末には西郷隆盛も何度か往復し「おはぐる」を落としたばかりの少年明治天皇の「鳳輦」が少なくとも2度は通ったであろう東海道についても興味は尽きませんが、紙数と時間の制約でこれ以上踏み込むことができませんでした。

第二次大戦・豊橋の戦災前後のことに関しては、編集委員の中で当時物心ついていた者の記憶を中心に作業をしましたが、「このことならあの人に尋ねたらよい」と思う「あの人」はこの30年ほどの間にほとんどの方が他界されており、高度成長期に地道な聞き書きをしておかなかったことが悔やまれてなりません。

引用し参照した事項についてはそのつど脚注で断わるのが正しいやり方ですが、読み易さを優先させて文献名を列記するにとどめました。

終わりに、御教示・御協力をいただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

(早川)

八町校区史編集委員会

大町 忠久	金田桂太郎	栗田 昌之	長谷川哲男
早川 奎	原 優	三井新太郎	宮田 昭五

※50音順

校区のあゆみ 八町

平成18年12月25日発行

編 集 八町校区総代会
八町校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 ぎょうせい

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association

